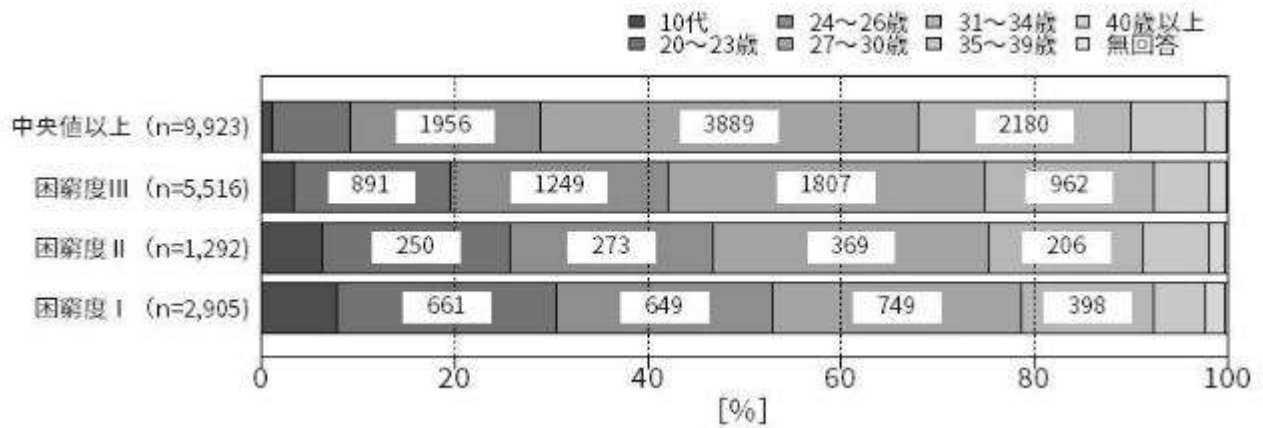


困窮度別に見た、初めて親となった年齢（保護者票 問 22）

※母親が回答者の場合に限定

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

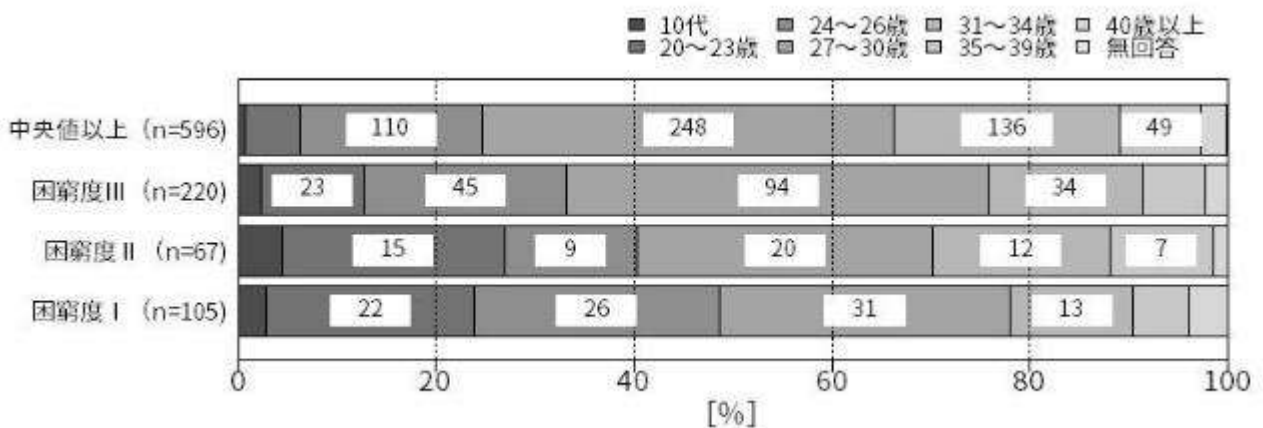


図 163. 困窮度別に見た、初めて親となった年齢

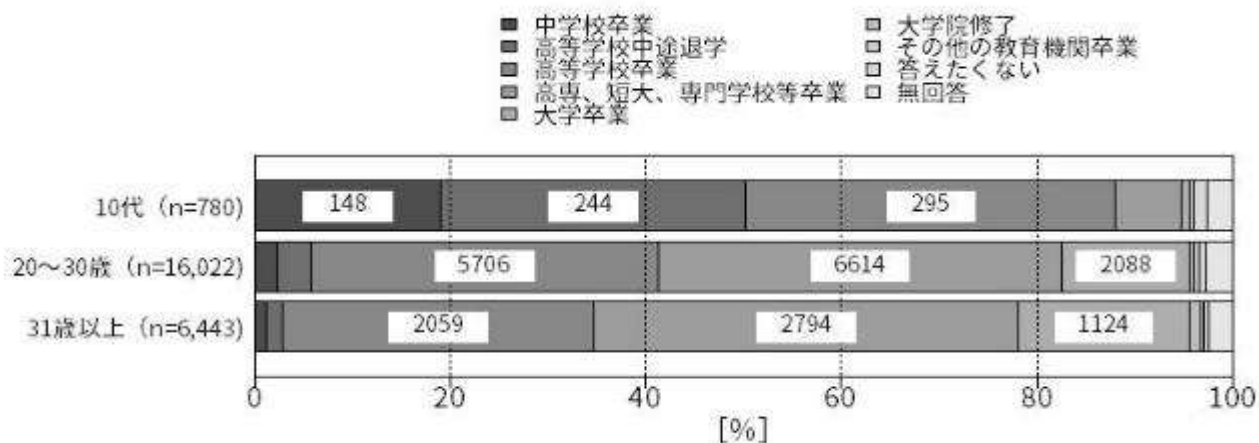
※母親が回答者の場合に限定

母親回答者を対象として、困窮度別に初めて親となった年齢を見ると、困窮度Ⅰ群で10代で初めて親となったと答えた割合は2.9%であった。若くして母親となった人ほど、経済的な問題を抱えている可能性が考えられる。

初めて親となった年齢別に見た、母親の最終学歴（保護者票 問 22 × 保護者票 問 8）

※母親が回答者の場合に限定

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

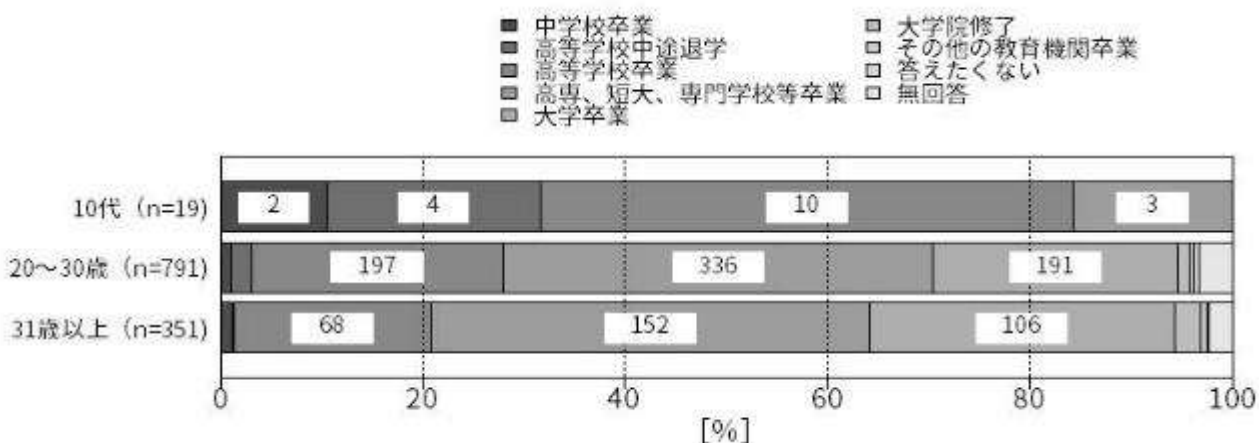


図 164. 初めて親となった年齢別に見た、母親の最終学歴

※母親が回答者の場合に限定

「初めて親となった年齢」を基準に、10代で初めて親となった10代群、平均出産年齢以下の年齢ではじめて親となった平均以下群（20～30歳）、平均出産年齢以上の年齢ではじめて親となった平均以上群（31歳以上）を設けた（平均出産年齢については下記 URL を参照）。

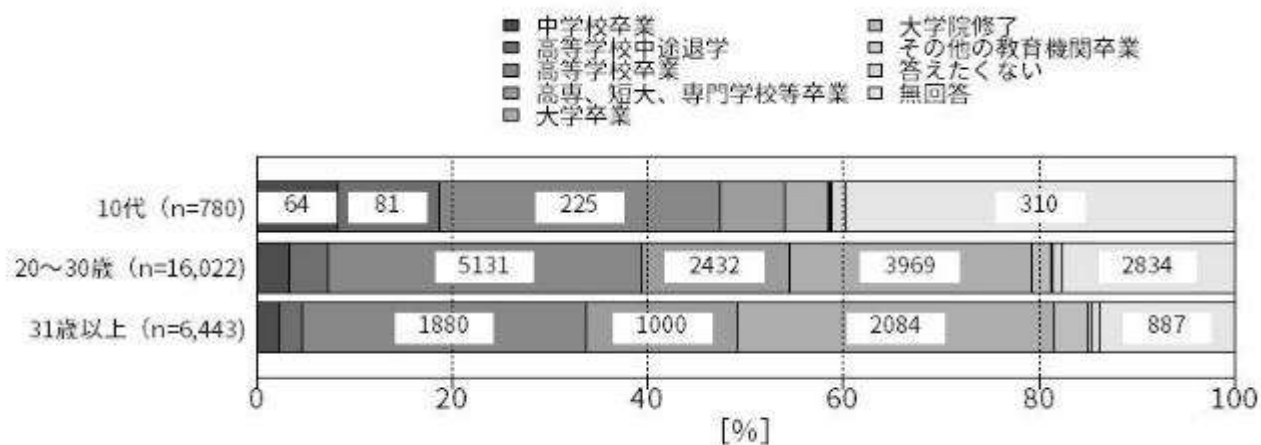
母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に母親自身の最終学歴を見ると、10代群において「中学校卒業」と答えた割合は10.5%であり、「高等学校中途退学」と回答した割合は21.1%であった。

平均出産年齢：

[http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2013/25webhonpen/html/b1\\_s1-1.html](http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2013/25webhonpen/html/b1_s1-1.html)

初めて親となった年齢別に見た、父親の最終学歴（保護者票 問 22 × 保護者票 問 8）  
 ※母親が回答者の場合に限定

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

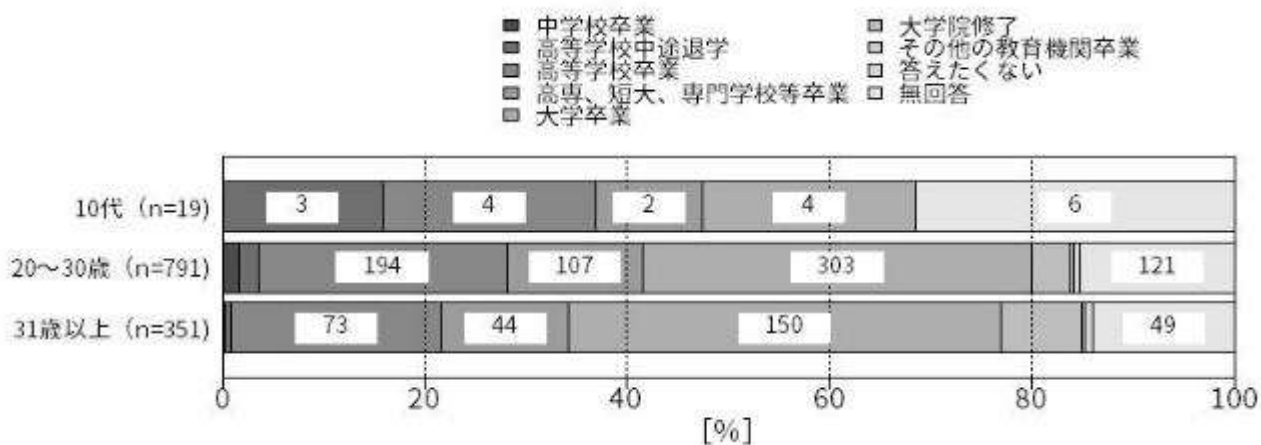
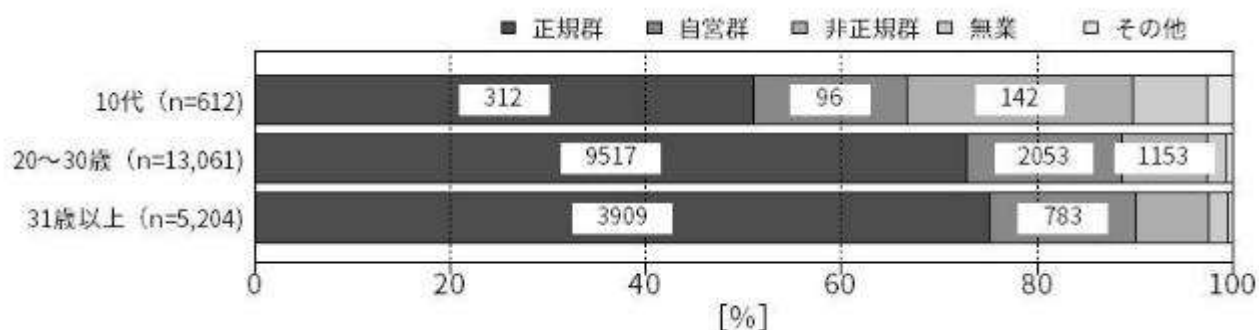


図 165. 初めて親となった年齢別に見た、父親の最終学歴  
 ※母親が回答者の場合に限定

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に父親の最終学歴を見ると、10 代群において「中学校卒業」は該当なし、「高等学校中途退学」と回答した割合は 15.8%であった。

初めて親となった年齢別に見た、就労状況（保護者票 問 22 × 保護者票 就労状況）  
※母親が回答者の場合に限定

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

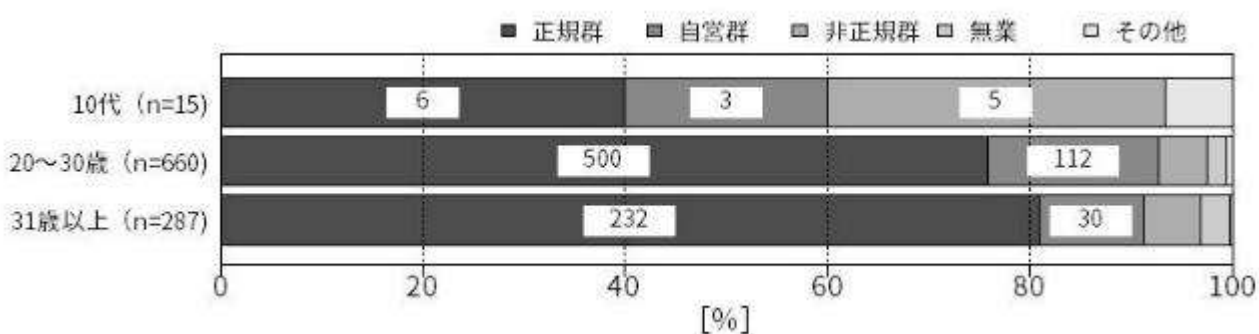
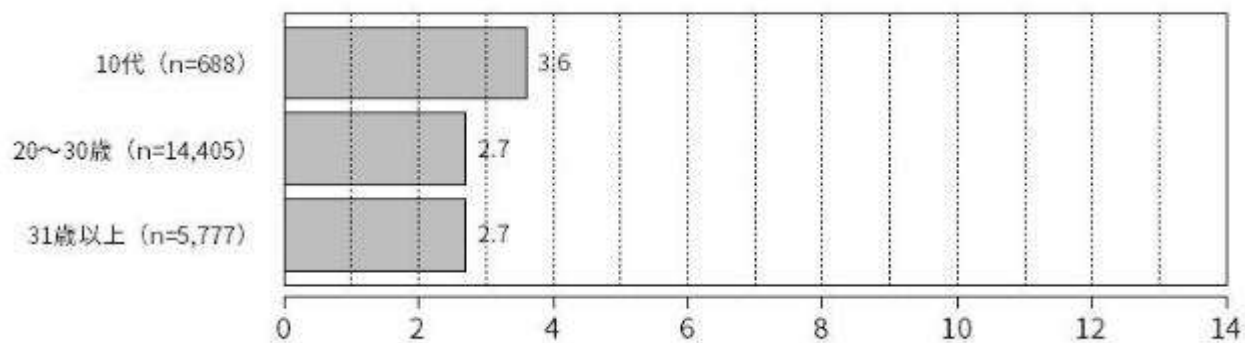


図 166. 初めて親となった年齢別に見た、就労状況  
※母親が回答者の場合に限定

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に就労状況を見ると、10 代群は「正規群」が 40.0%、「非正規群」の割合が 33.3%であった。

初めて親となった年齢別に見た、自分の体や気持ちで気になること  
 (保護者票 問 22 × 保護者票 問 26) ※母親が回答者の場合に限定

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

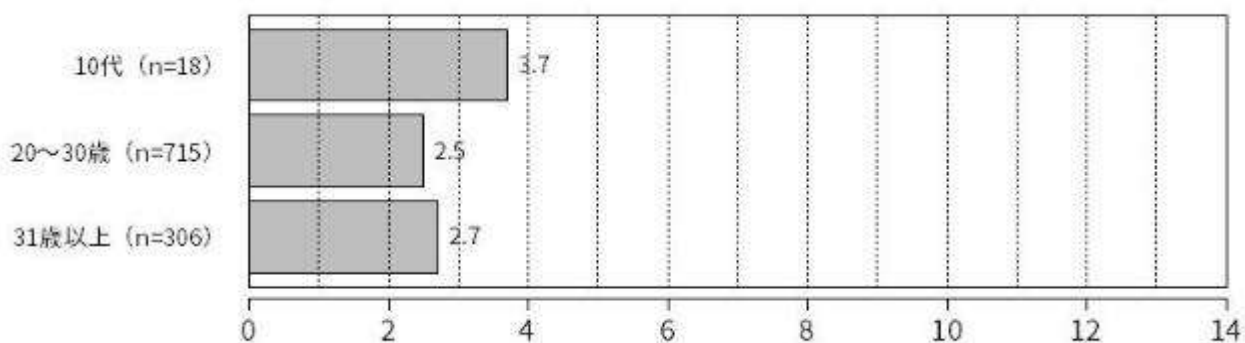
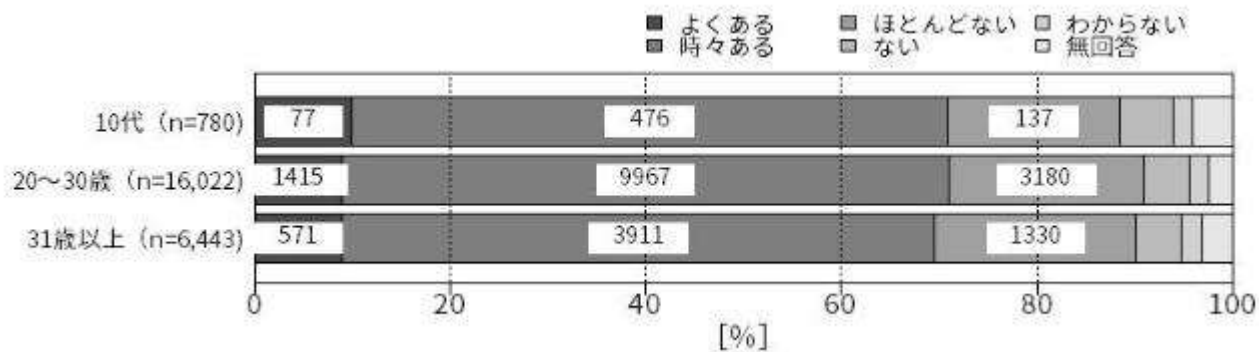


図 167. 初めて親となった年齢別に見た、自分の体や気持ちで気になること  
 ※母親が回答者の場合に限定

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、10 代群は 3.7 個であった。

初めて親となった年齢別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと  
 (保護者票 問 22 × 保護者票 問 27) ※母親が回答者の場合に限定

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

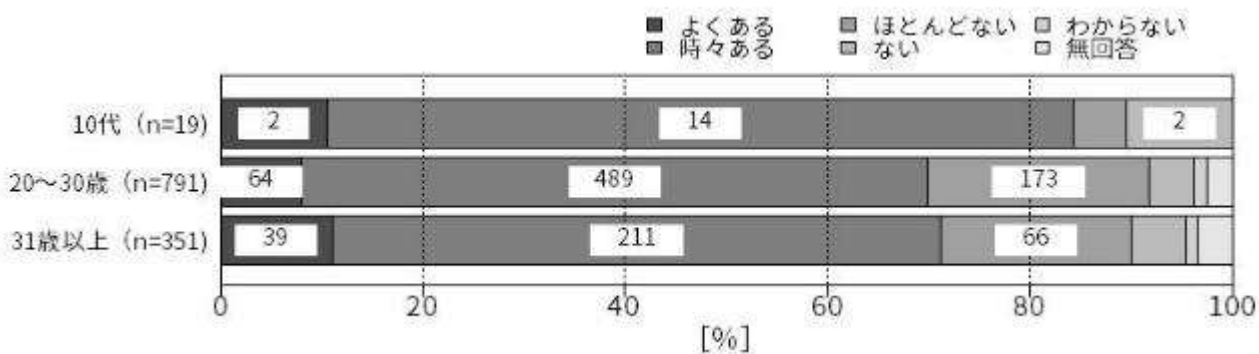
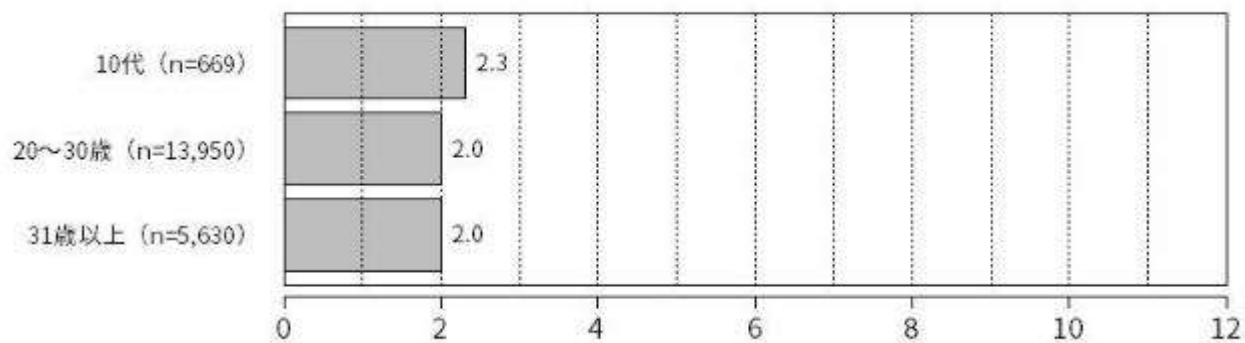


図 168. 初めて親となった年齢別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと  
 ※母親が回答者の場合に限定

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうことを見ると、10代群は、「よくある」と回答した割合は10.5%であった。

初めて親となった年齢別に見た、自分の体や気持ちで気になること  
 (保護者票 問 22 × 子ども票 問 24) ※母親が回答者の場合に限定

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

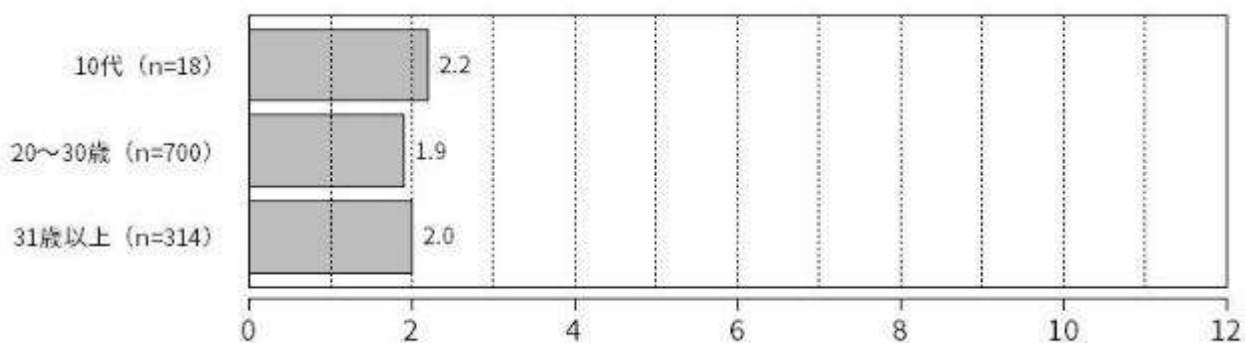
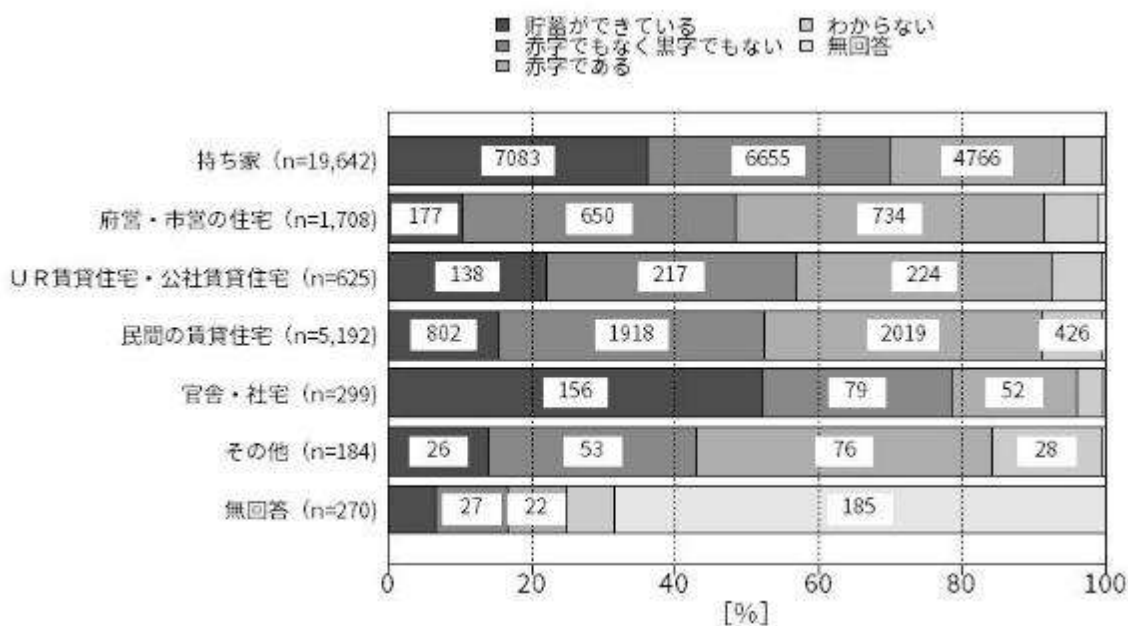


図 169. 初めて親となった年齢別に見た、自分の体や気持ちで気になること  
 ※母親が回答者の場合に限定

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に子どもが自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、10代群では2.2個であった。

住居別に見た、家計状況（保護者票 問4 × 保護者票 問6(1)）

<大阪市24区>



<大阪市阿倍野区>

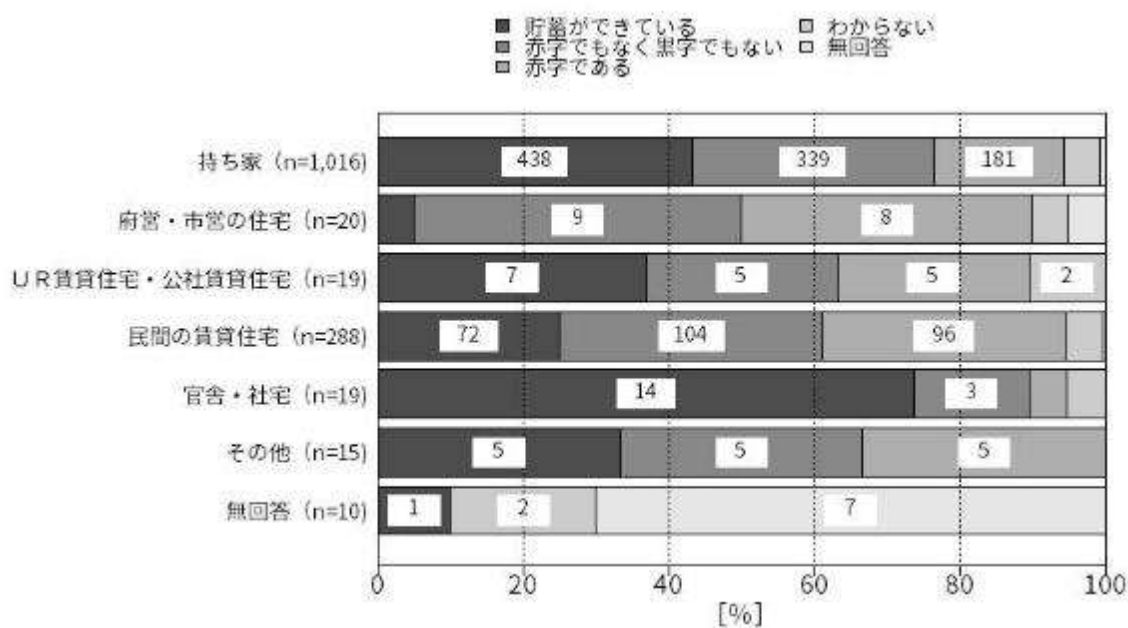


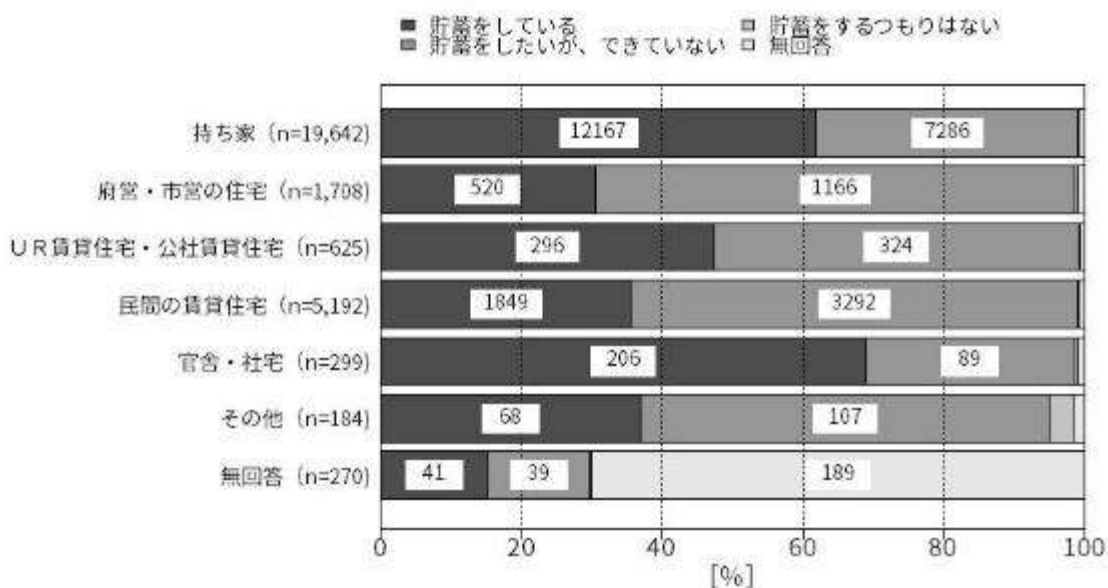
図 170. 住居別に見た、家計状況

「赤字であった」と回答した人の割合を住居別に見ると、府営・市営の住宅に住む人では 40.0%、UR 賃貸住宅・公社賃貸住宅に住む人では 26.3%、民間の賃貸住宅に住む人では 33.3%であった。また、持ち家に住む人で「赤字であった」と回答した割合は 17.8%であった。



住居別に見た、子どものための貯蓄（保護者票 問4 × 保護者票 問6(3)）

<大阪市24区>



<大阪市阿倍野区>

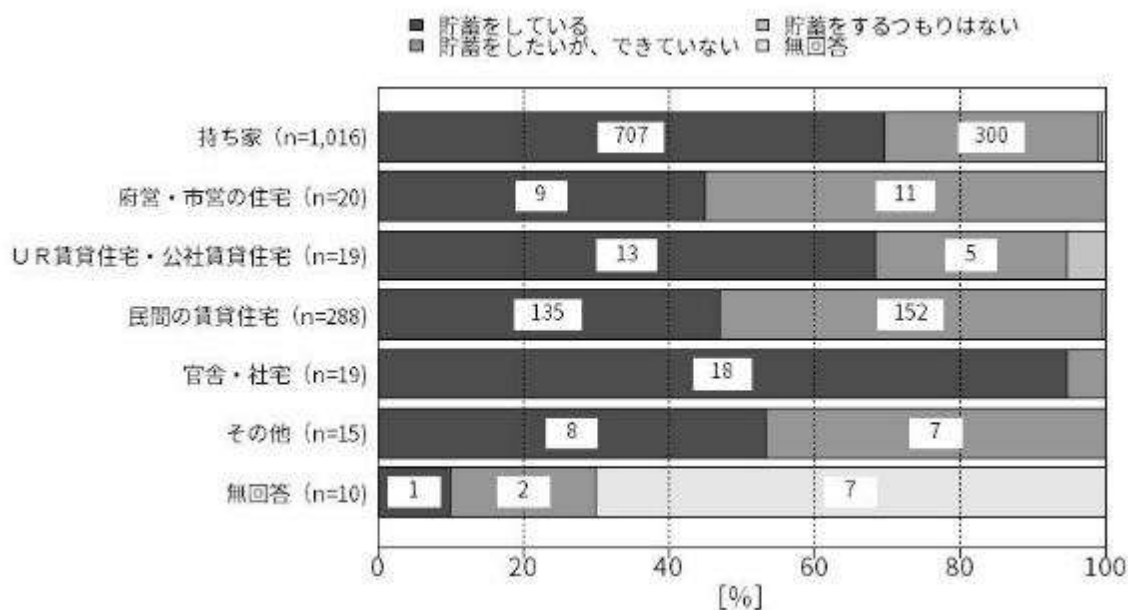


図 171. 住居別に見た、子どものための貯蓄

「貯蓄したいが、できていない」と回答した人の割合を住居別に見ると、府営・市営の住宅に住む人では 55.0%、UR 賃貸住宅・公社賃貸住宅に住む人では 26.3%、民間の賃貸住宅に住む人では 52.8% であった。また、持ち家に住む人で「貯蓄をしたいが、できていない」と回答した割合は 29.5% であった。

## <家庭状況に関する考察>

社会保障給付の利用状況について、困窮度Ⅰ群における各制度の利用率を挙げると、児童手当 87.2%（大阪市 93.2%）、就学援助費 64.0%（大阪市 64.4%）、児童扶養手当 70.8%（大阪市 76.2%）、生活保護制度 8.0%（大阪市 9.6%）である。生活保護世帯について、受けていない世帯と比較すると次の違いが見られた。生活を「楽しんでいない」、将来に対して「希望が持てない」、ストレスを発散できるものが「ない」、「幸せだと思わない」、「相談できる相手がいない」、おうちの大人の人と一緒に夕食を食べることが「まったくない」、おうちの大人の人に宿題（勉強）をみてもらうことが「まったくない」、おうちの大人の人と文化活動をするのが「まったくない」おうちの大人の人と一緒に外出することが「まったくない」、授業時間以外に勉強を「まったくしない」、「学習塾等、習い事はしていない」、学校の勉強を「ほとんどわからない」などの回答が高い傾向が見られた。子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の平均点は生活保護世帯では 17.4 点（大阪市 17.7 点）、生活保護を受けたことがない世帯では 18.8 点（大阪市 18.5 点）であった。生活保護世帯では、希望する進学先を「大学・短期大学」と回答した子どもが 23.1%に対し、生活保護を受けたことがない世帯では 43.9%であった。

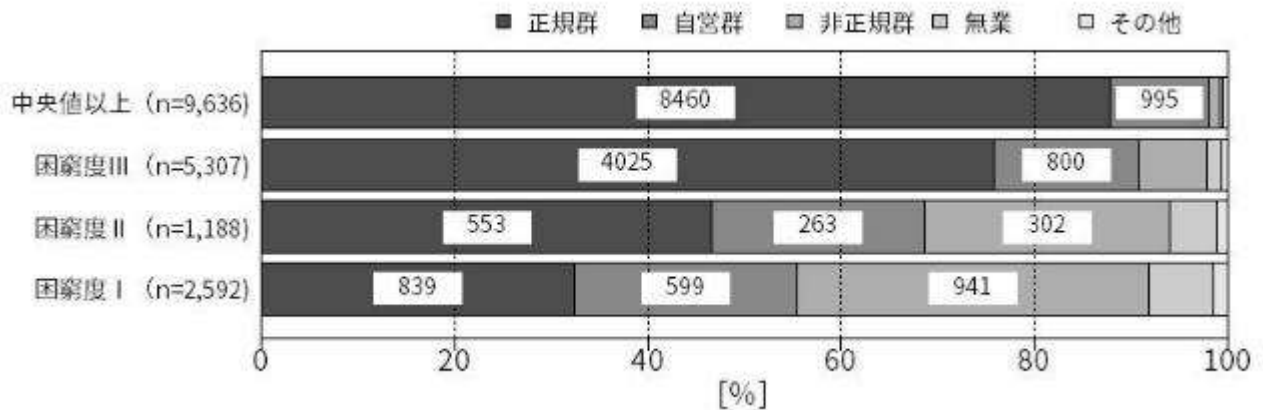
母親回答者を対象として、10代で初めて親となったと答えた割合は困窮度Ⅰ群では 2.9%（大阪市 7.8%）、困窮度Ⅱ群では 4.5%（大阪市 6.3%）であった。10代群において「中学校卒業」または「高等学校中途退学」と回答した割合が高くなっている。就労状況を見ると、10代群は他の群と比較して「正規群」の割合が低くなっている（大阪市の傾向とは同じ）。また、他の群と比較して、自分の体や気持ちで気になると回答したことの数が多い。

家計について「赤字である」と回答した人の割合を住居別に見ると、府営・市営の住宅（40.0%）、UR 賃貸住宅・公社賃貸住宅（26.3%）、民間の賃貸住宅（33.3%）で高かった。子どものために「貯蓄したいが、できていない」と回答した人の割合を住居別に見ると、府営・市営の住宅（55.0%）、UR 賃貸住宅・公社賃貸住宅（26.3%）、民間の賃貸住宅（52.8%）で高かった。また、持ち家に住む人で「貯蓄をしたいが、できていない」と回答した割合は 29.5%であった。

### 3-2. 雇用

#### 困窮度別に見た、就労状況（保護者票 就労状況）

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

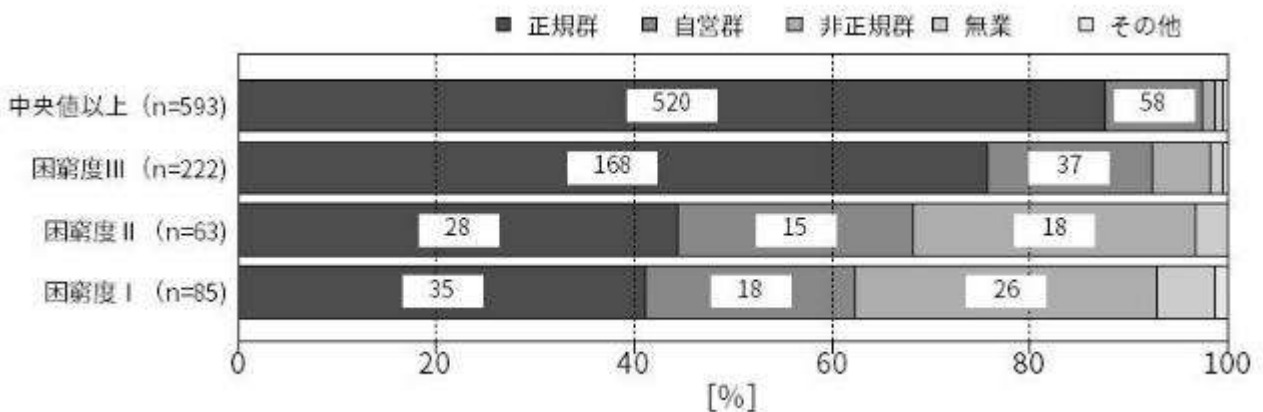


図 172. 困窮度別に見た、就労状況

困窮度別に就労状況を見ると、困窮度が高まるにつれ、「正規群」の割合が低くなり、「自営群」・「非正規群」の割合が高くなる傾向にある。困窮度Ⅰ群では「正規群」の割合が41.2%、「非正規群」の割合が30.6%となっていた。

※就労形態は以下のように分類している。

父母あるいは主たる生計者に正規が含まれば「正規群」（問9選択肢1）、

上記以外で、父母あるいは主たる生計者に自営が含まれば「自営群」（問9選択肢4）、

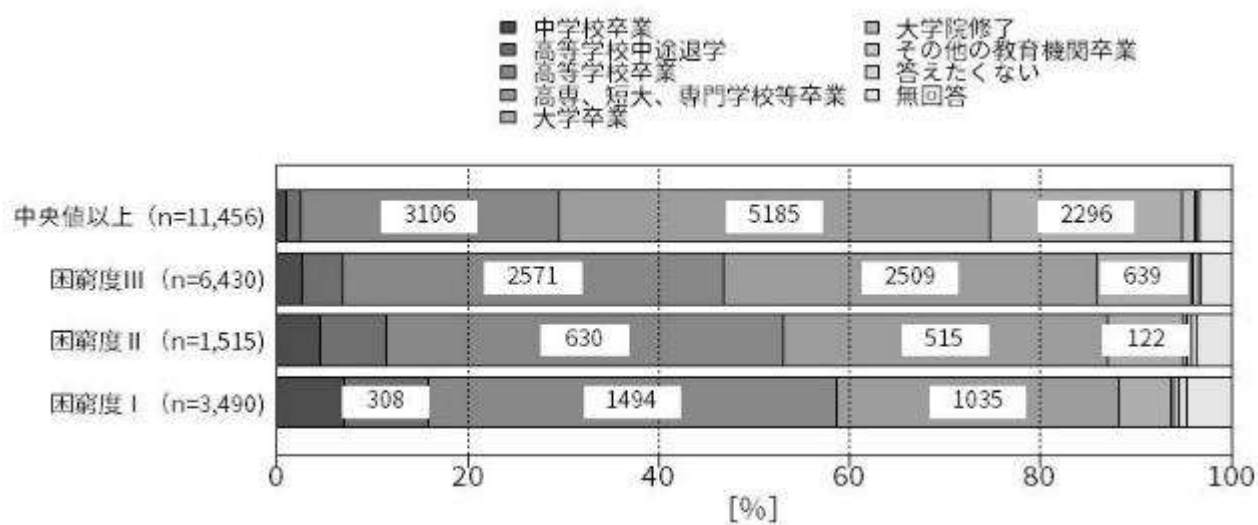
上記以外で、父母あるいは主たる生計者に非正規が含まれば「非正規群」（問9選択肢2、3）、

上記以外で、誰も働いていなければ（問9選択肢6、7）無業。

上記以外がその他 となる。

困窮度別に見た、母親の最終学歴（保護者票 問8）

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

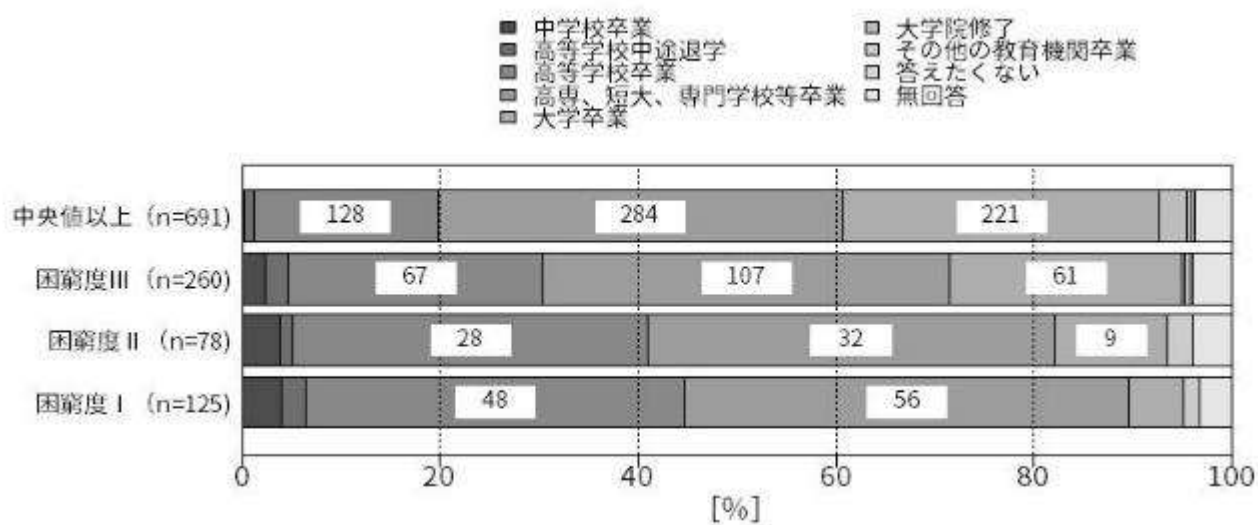
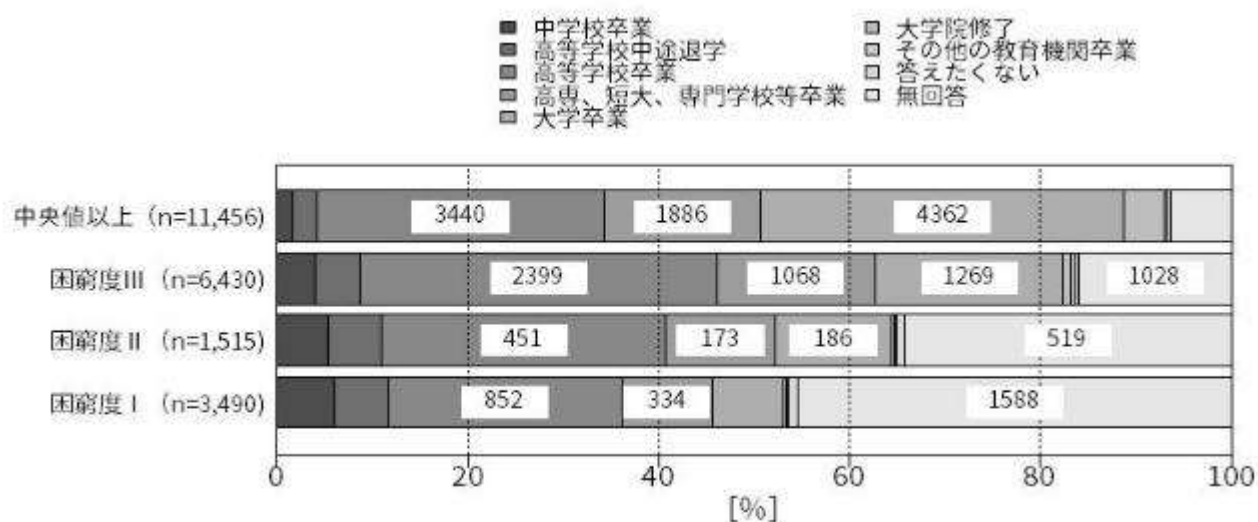


図 173. 困窮度別に見た、母親の最終学歴

困窮度別に母親の最終学歴を見ると、困窮度Ⅰ群の「中学校卒業」は4.0%、「高等学校中途退学」は2.4%、「高等学校卒業」の割合が38.4%であった。

困窮度別に見た、父親の最終学歴（保護者票 問8）

<大阪市24区>



<大阪市阿倍野区>

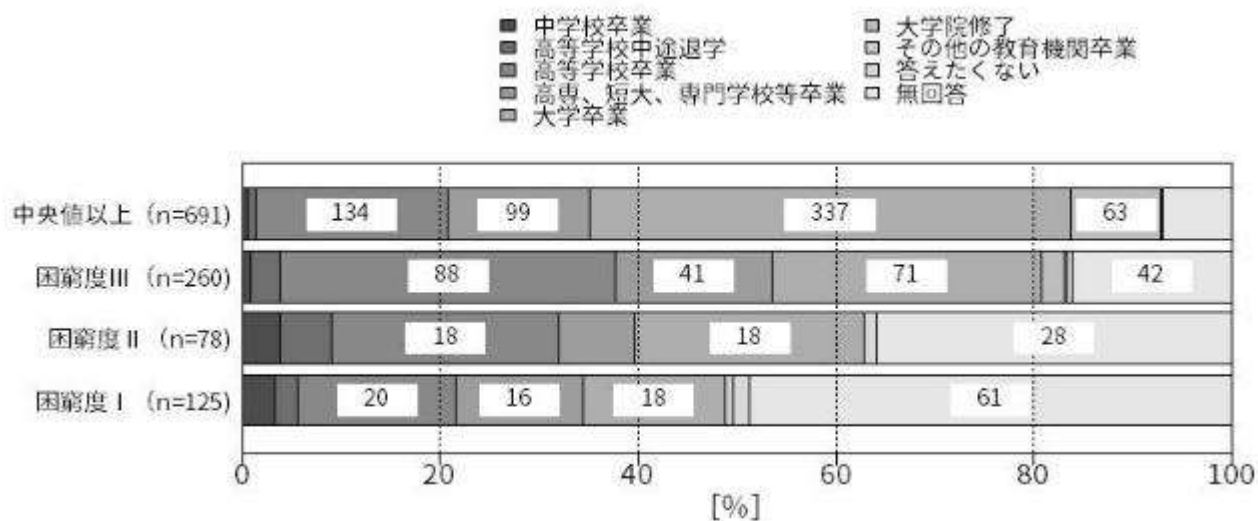
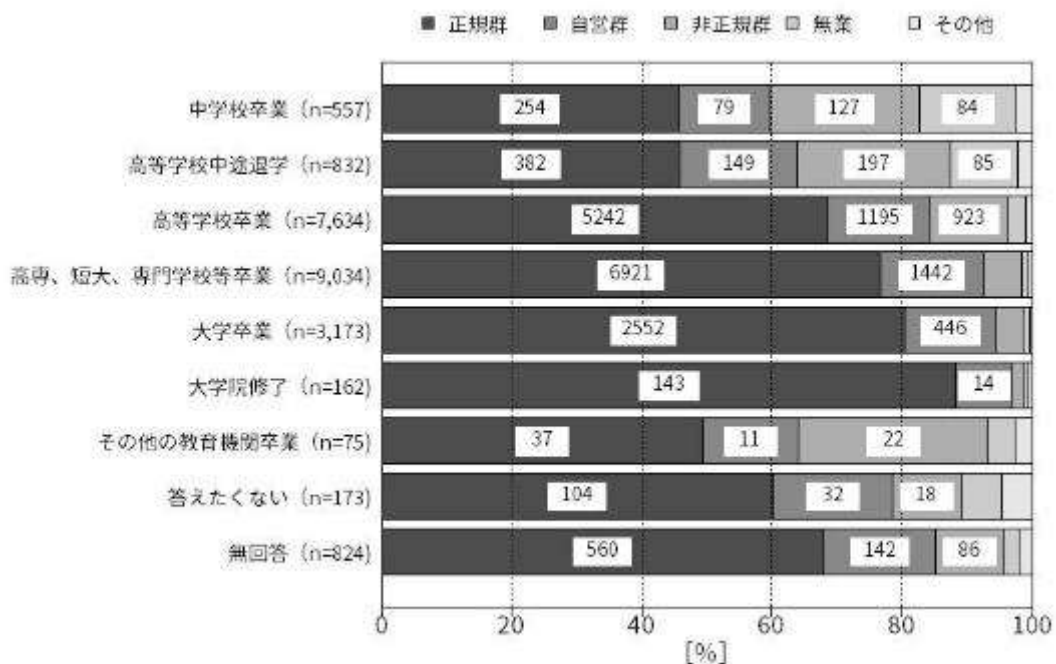


図 174. 困窮度別に見た、父親の最終学歴

困窮度別に父親の最終学歴を見ると、困窮度Ⅰ群において、「中学校卒業」と「高等学校中途退学」の割合はそれぞれ 3.2%、2.4%であった。また、困窮度Ⅰ群では無回答の割合も高い（48.8%）。

母親の最終学歴別に見た、就労状況（保護者票 問8 × 保護者票 就労状況）

<大阪市24区>



<大阪市阿倍野区>

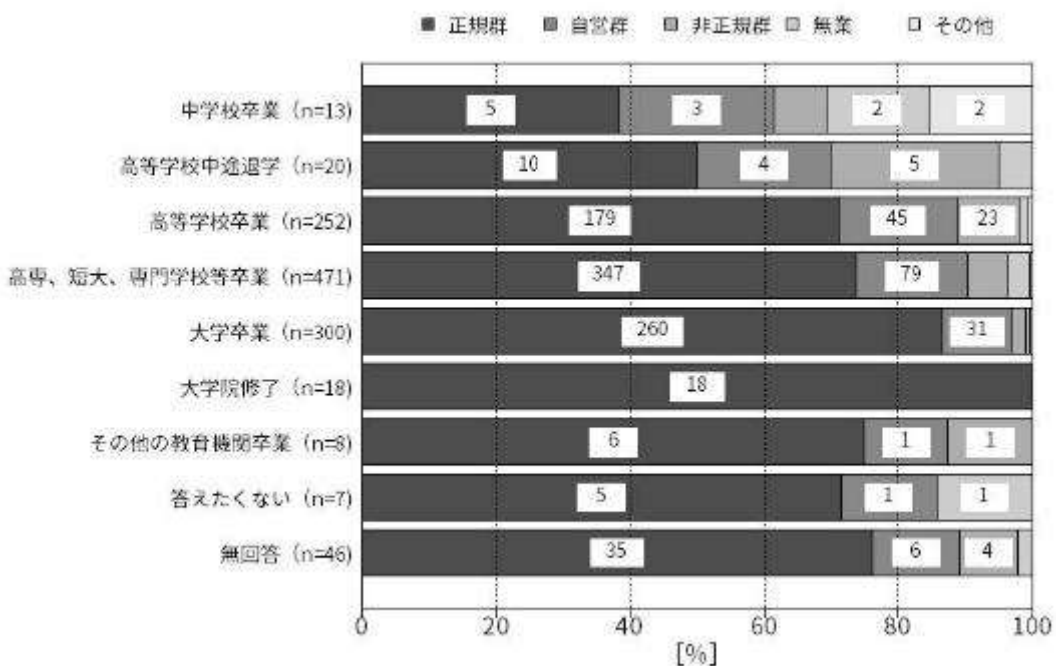
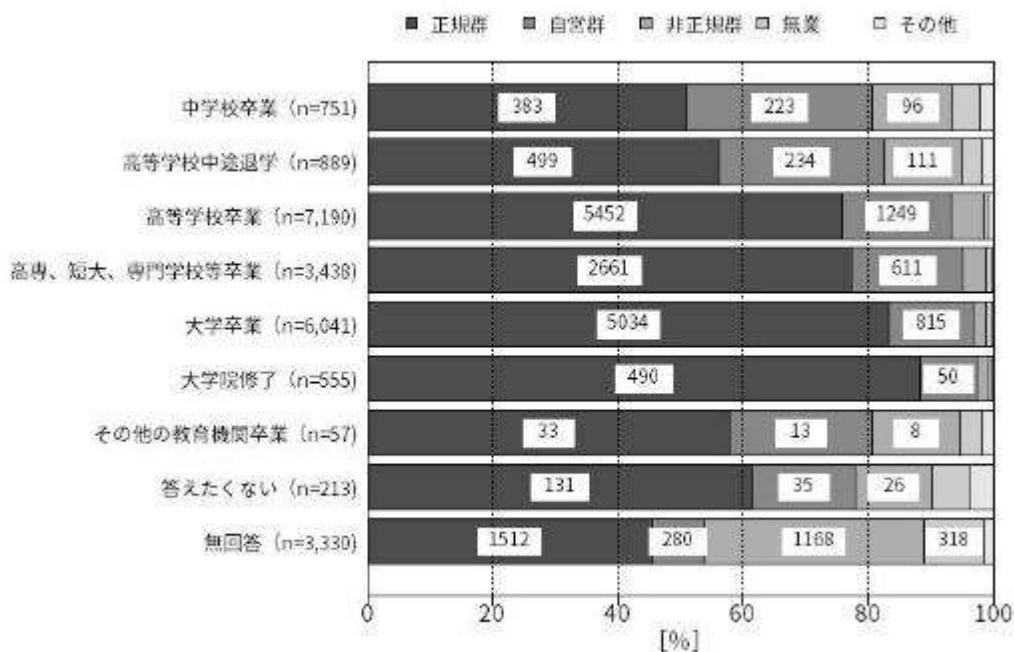


図 175. 母親の最終学歴別に見た、就労状況

母親の最終学歴別に就労状況を見ると、概ね、「母親の最終学歴」が高くなるにつれて「正規群」の割合が高くなる。

父親の最終学歴別に見た、就労状況（保護者票 問8 × 保護者票 就労状況）

<大阪市24区>



<大阪市阿倍野区>

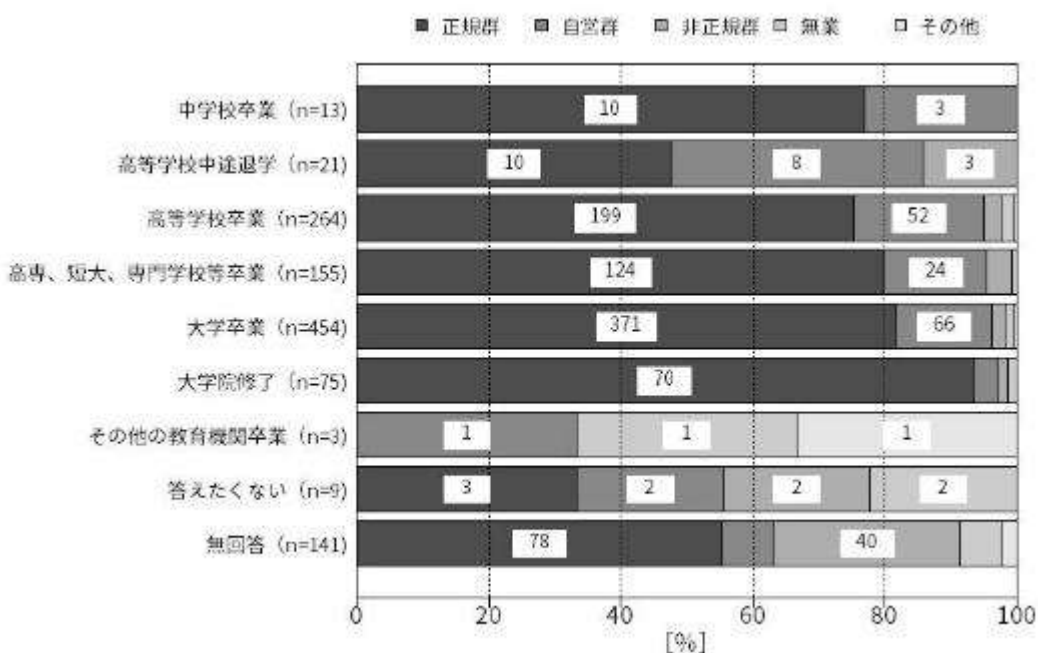
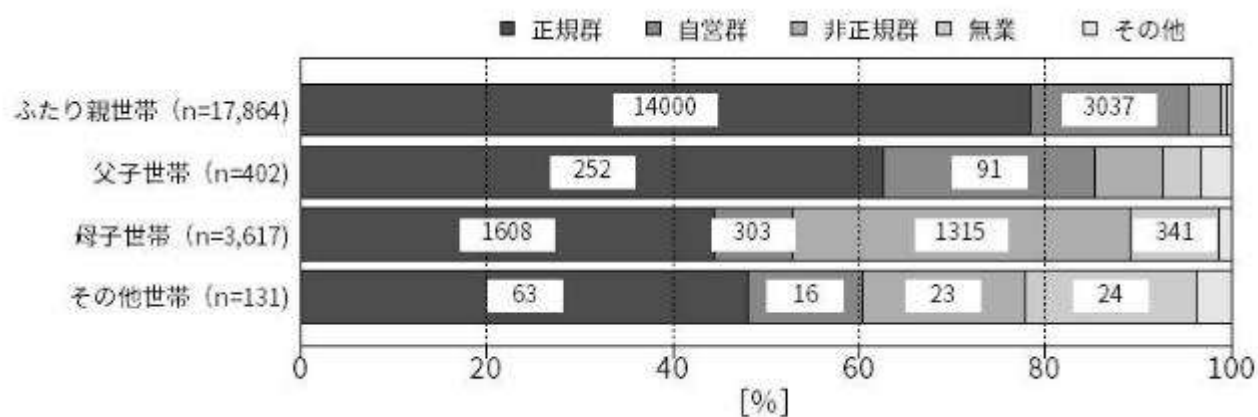


図 176. 父親の最終学歴別に見た、就労状況

父親の最終学歴別に就労状況を見ると、概ね、「父親の最終学歴」が高くなるにつれて「正規群」の割合が高くなる。

世帯構成別に見た、就労状況（保護者票 就労状況）

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

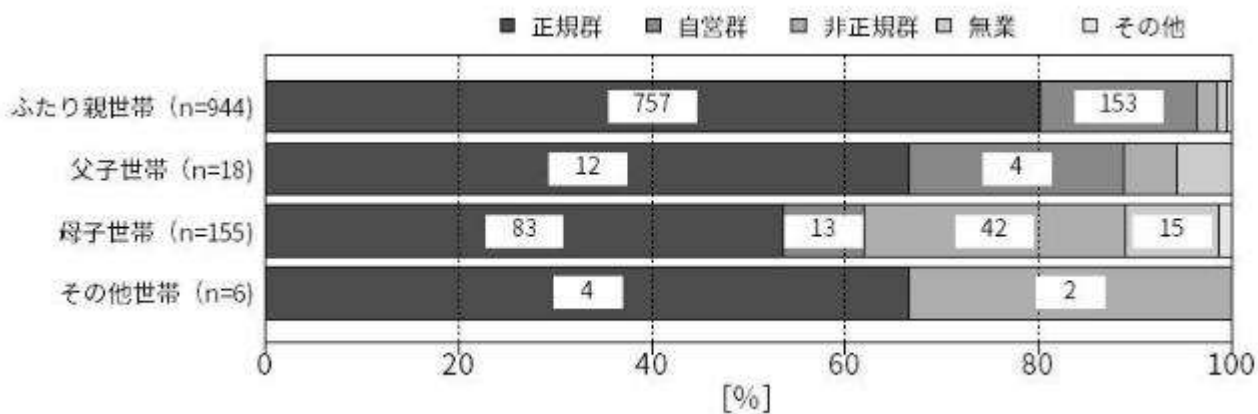


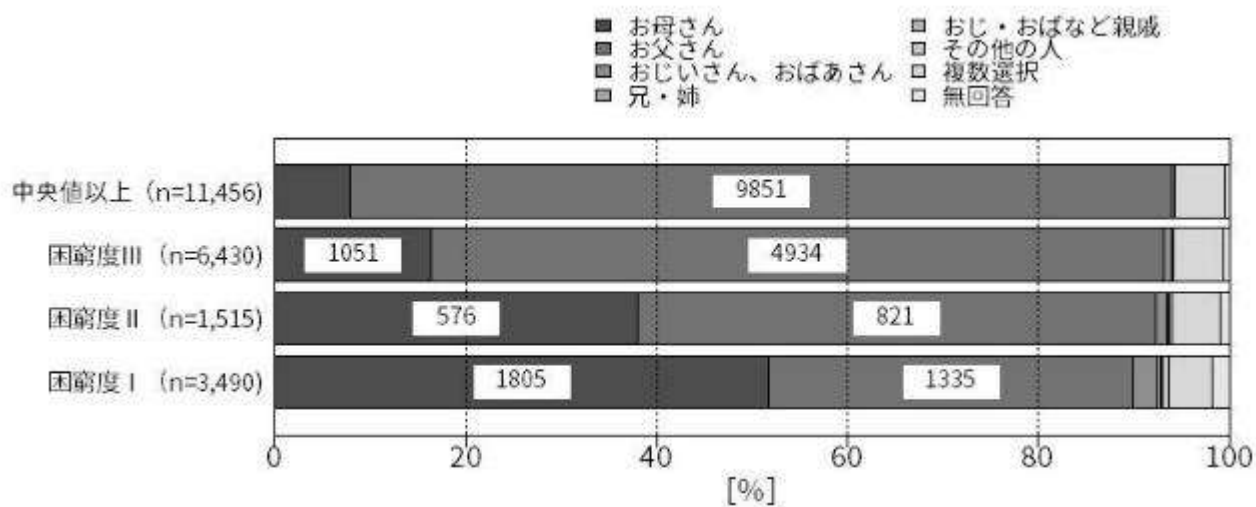
図 177. 世帯構成別に見た、就労状況

世帯構成別に就労状況を見ると、「ふたり親世帯」では「正規群」の割合が 80.2%であったが、「父子世帯」では 66.7%、「母子世帯」では 53.5%であった。「非正規群」は、「父子世帯」では 5.6%、「母子世帯」では 27.1%となっている。



困窮度別に見た、生計の支えとなる人（保護者票 問 30(2)）

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

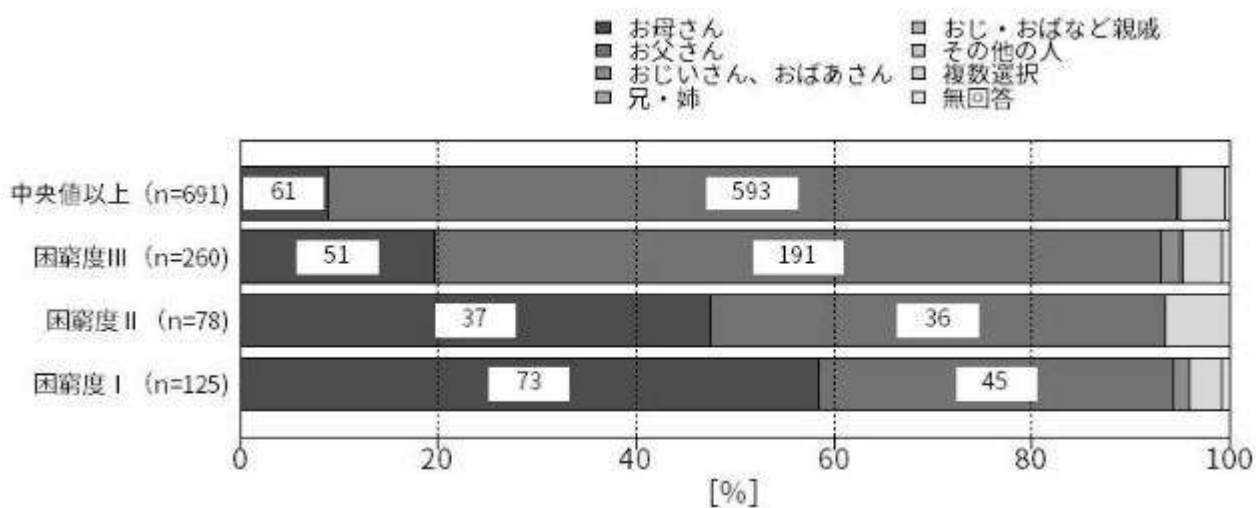
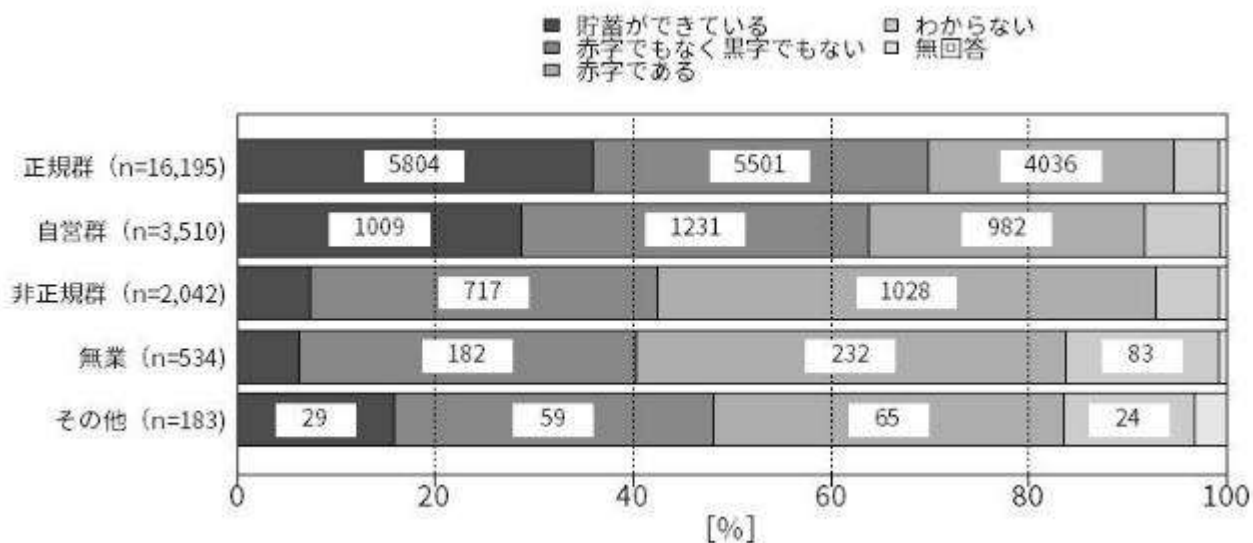


図 178. 困窮度別に見た、生計の支えとなる人

困窮度別に生計の支えとなる人を見ると、中央値以上群では「お父さん」という回答が 85.8%であった。困窮度が高まるにつれ、「お母さん」という回答が多くなる。困窮度Ⅱ群では「お母さん」という回答は 47.4%、困窮度Ⅰ群では 58.4%であった。

<大阪市24区>



<大阪市阿倍野区>

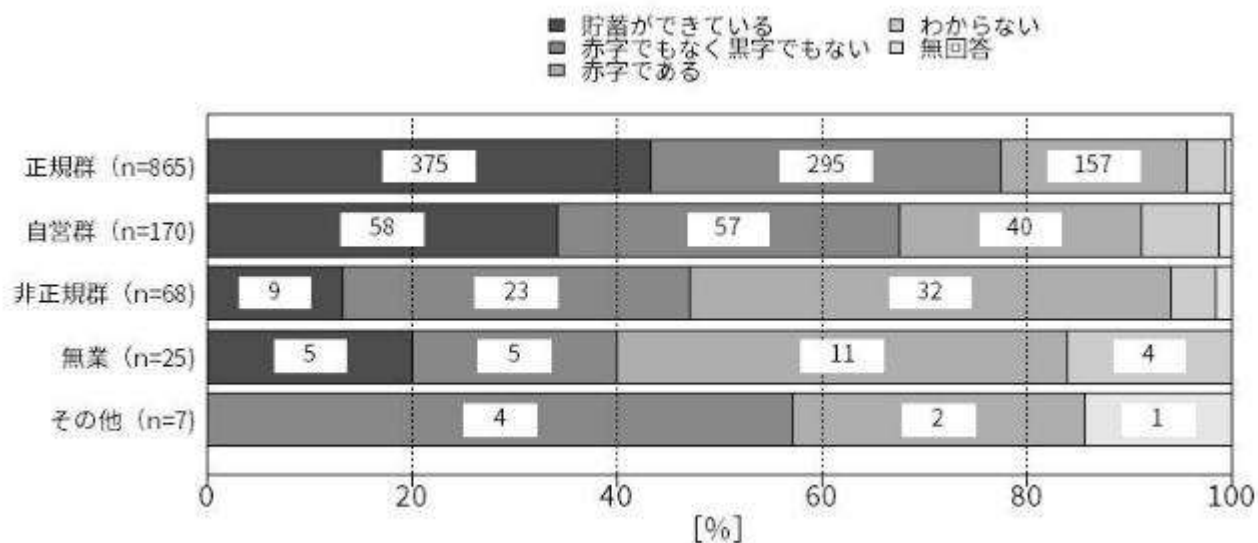


図 179. 就労状況別に見た、家計状況

就労状況別に家計状況を見ると、「正規群」・「自営群」では貯蓄ができている割合がそれぞれ、43.4%、34.1%であった。「非正規群」では「赤字である」と回答した人が47.1%であった。「赤字でもなく黒字でもない」群に大きな差は見られない。

### <雇用に関する考察>

本調査では、雇用形態が、所得階層の分布に反映されていることが示されている。すなわち、中央値以上の群では、正規雇用が 87.7%であったのに対して、困窮度Ⅰの群では 41.2%にとどまり、非正規雇用は 30.6%であった。なお、正規雇用であるにも関わらず、困窮度Ⅰの群になるという点は、いわゆるワーキングプアの問題として注意する必要がある。

また、困窮度が高い群ほど学歴が低い傾向にある。母親の学歴を見ると中央値以上の群では 32.0%が大学卒であるのに対して、困窮度Ⅰの群では 5.6%であった。父親の学歴を見ると、中央値以上の群では 48.8%が大学卒であるのに対して、困窮度Ⅰの群では 14.4%であった。困窮度Ⅰにおいて母親が中卒あるいは高校中退である割合は 6.4%であったのに対して、中央値以上の群では、中卒が 0.1%、高校中退が 1.0%であった。父親の場合は、中央値以上の群で中卒もしくは高校中退である割合は 1.3%であったのに対し、困窮度Ⅰの群ではそれぞれ 3.2%と 2.4%であった。学歴が高い群ほど正規雇用の割合が高くなる傾向もみられた。大学卒の場合、80%以上が正規雇用であった。

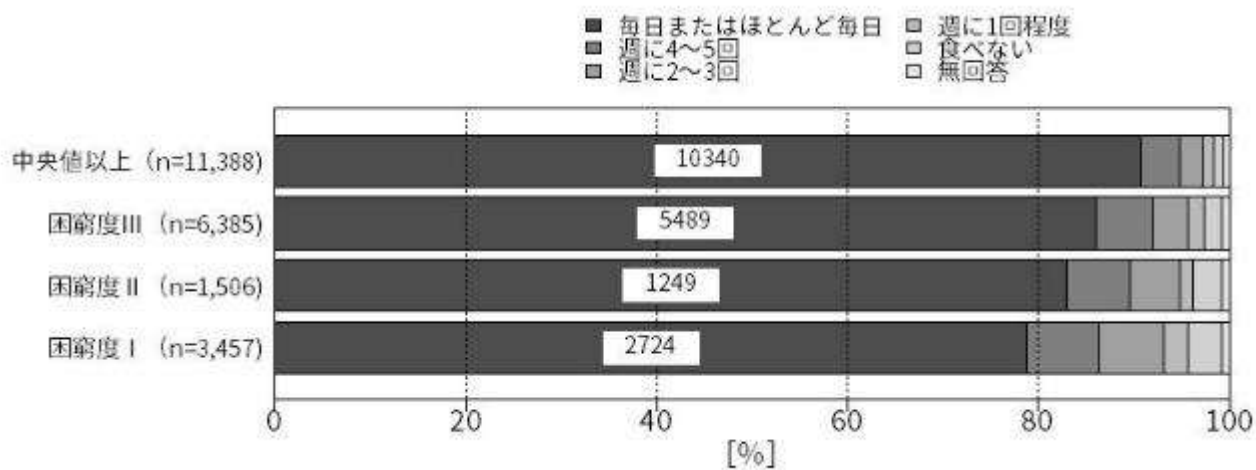
世帯構成と就労状況の関係をみると、ふたり親世帯や父子世帯と比べて、母子世帯では非正規雇用の割合が高く、27.1%となっていた。主たる生計維持者が母親である場合に、困窮度Ⅰの群に該当する世帯は 58.4%であった。

最後に、正規雇用である世帯の約 40%は、貯蓄ができるのに対し、非正規雇用の群ではその割合は 13.2%にとどまり、47.1%の世帯が赤字であると回答している。

### 3-3. 健康

#### 困窮度別に見た、朝食の頻度（子ども票 問5(1)）

<大阪市24区>



<大阪市阿倍野区>

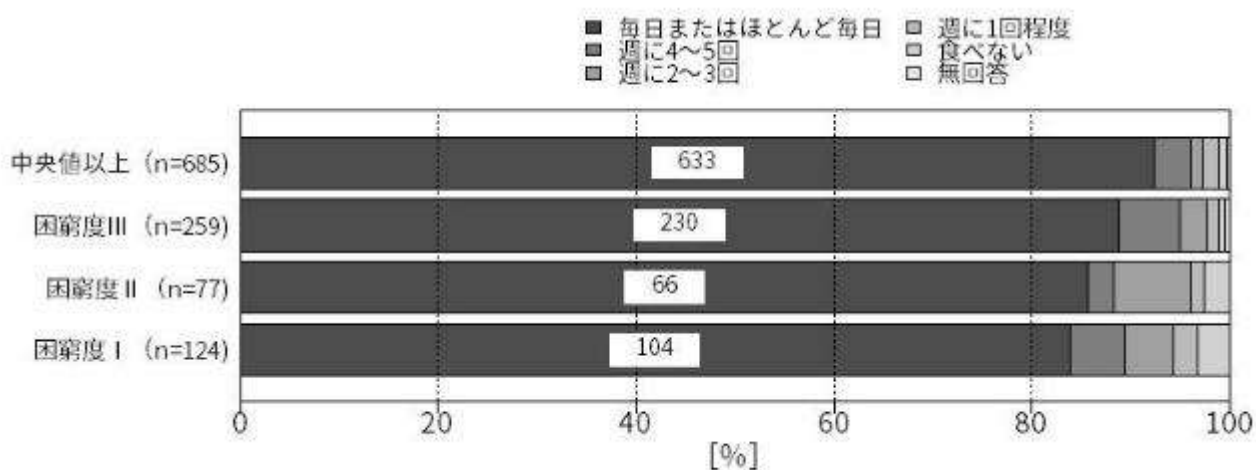
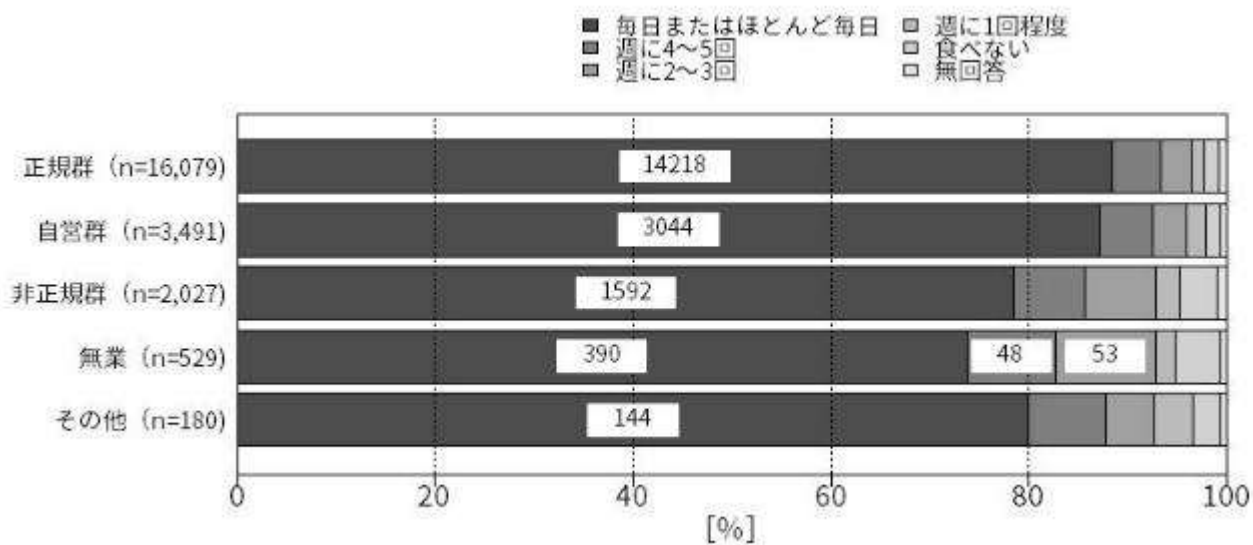


図 180. 困窮度別に見た、朝食の頻度

困窮度別に朝食の頻度を見ると、困窮度が高くなるにしたがって、「毎日またはほとんど毎日」朝食を食べる頻度が減る傾向が見られた。困窮度Ⅰ群では、16.1%が「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていないと回答した。

就労状況別に見た、朝食の頻度（子ども票 問5(1)）

<大阪市24区>



<大阪市阿倍野区>

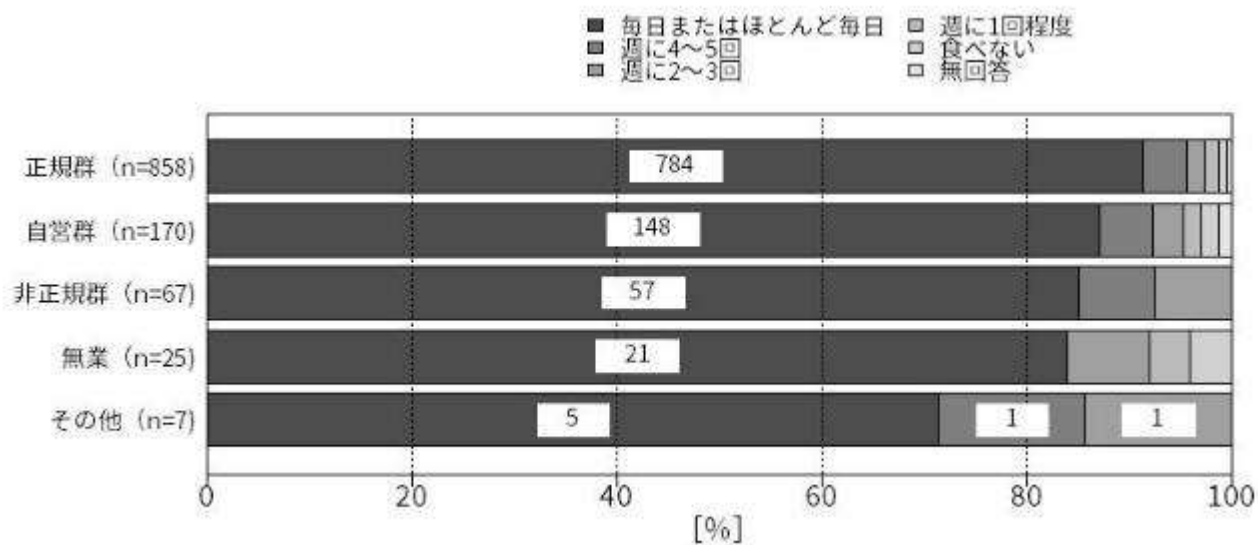


図 181. 就労状況別に見た、朝食の頻度

就労状況別に朝食の頻度を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる割合は、「正規群」で 91.4%、「自営群」で 87.1%、「非正規群」で 85.1%、「無業」で 84.0%、「その他」で 71.4%であった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）

（子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(1)）

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>



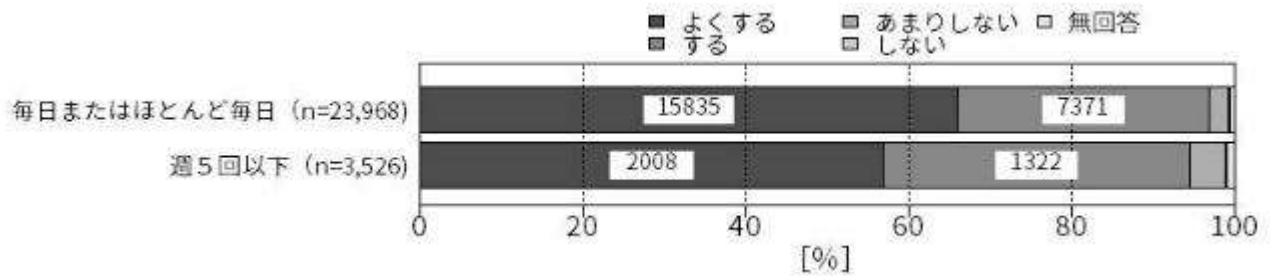
図 182. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、子どもを「とても信頼している」との回答が 52.7%であったのに対し、「週 5 回以下」では、「とても信頼している」と回答した人は 42.4%であった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）

（子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(2)）

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

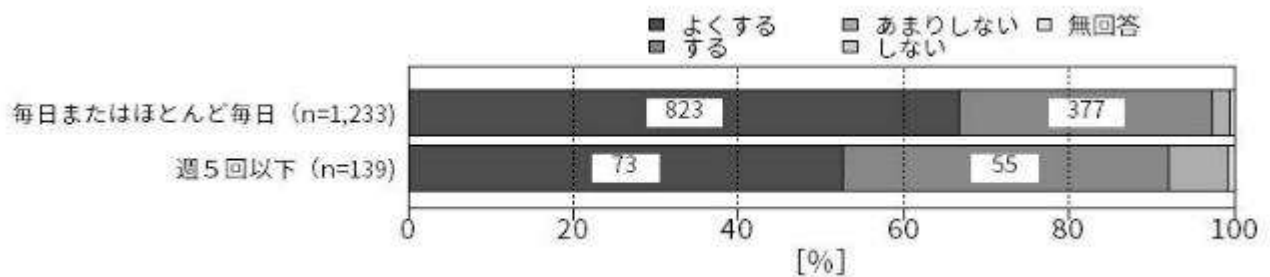
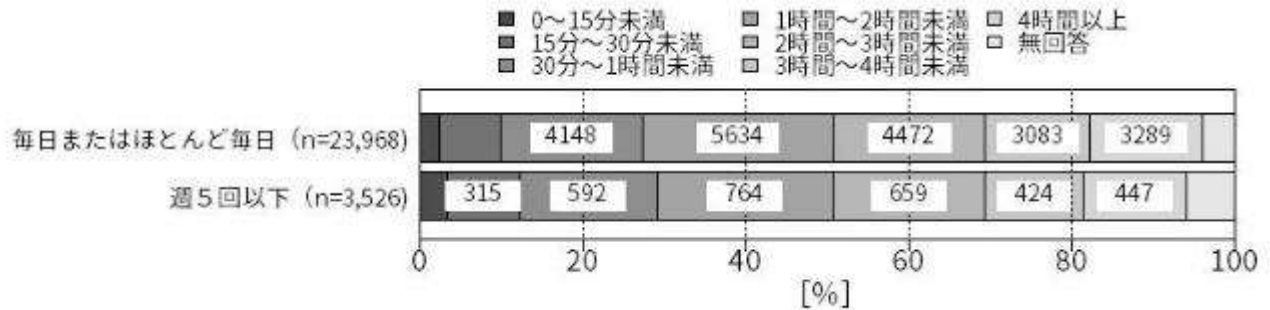


図 183. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと会話）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、子どもと「よく会話をする」との回答が 66.7%であり、「週 5 回以下」では、「よく会話をする」と回答した人は 52.5%であった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））  
（子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(3)）

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

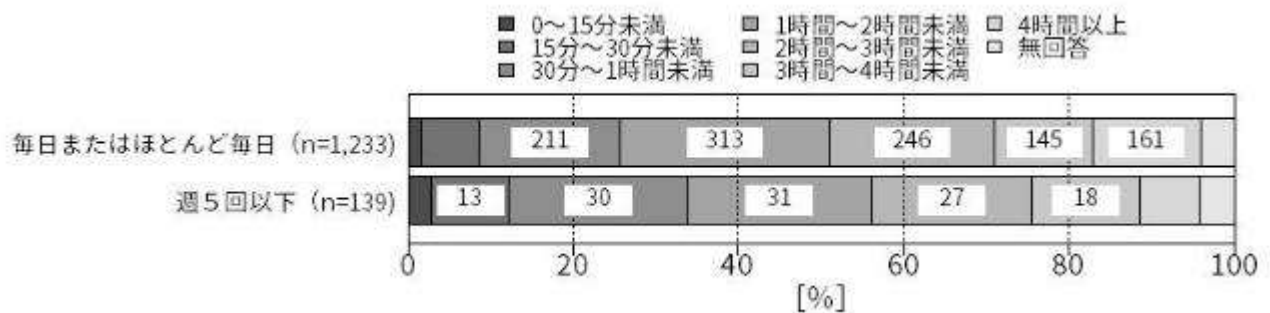


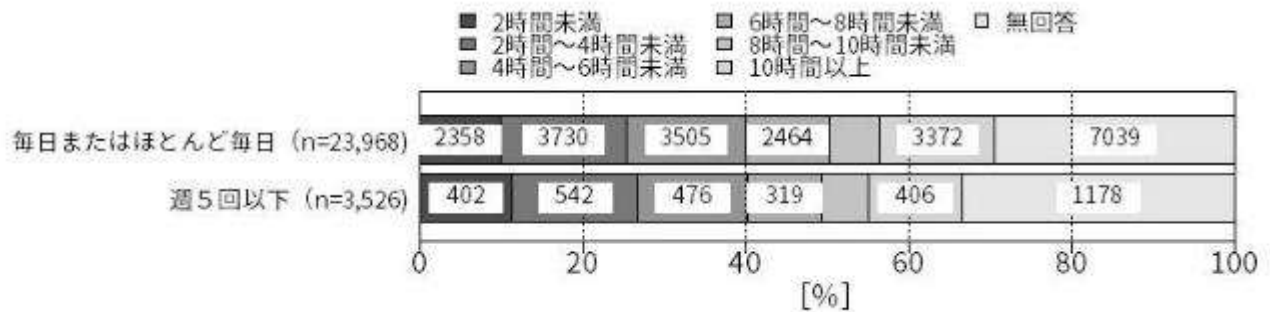
図 184. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり  
（子どもと一緒にいる時間（平日））

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人のほうが「週5回以下」の人よりも平日に子どもと一緒にいる時間が長くなっている傾向にあった。



朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））  
 （子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(3)）

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

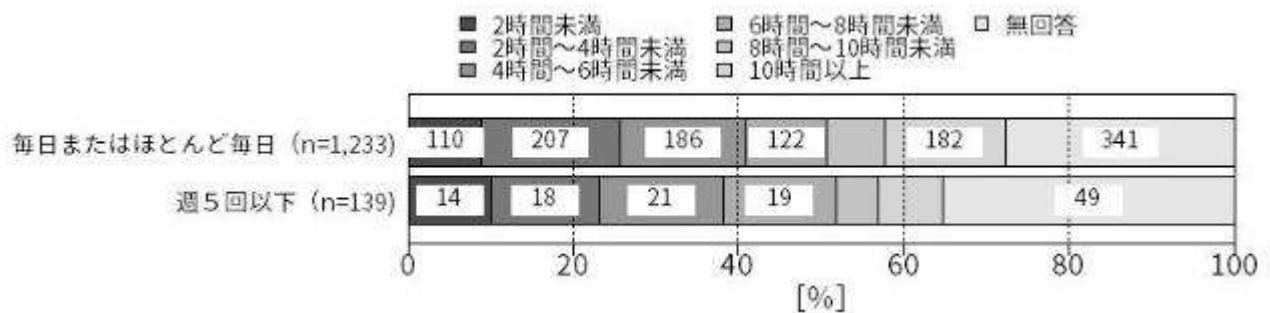


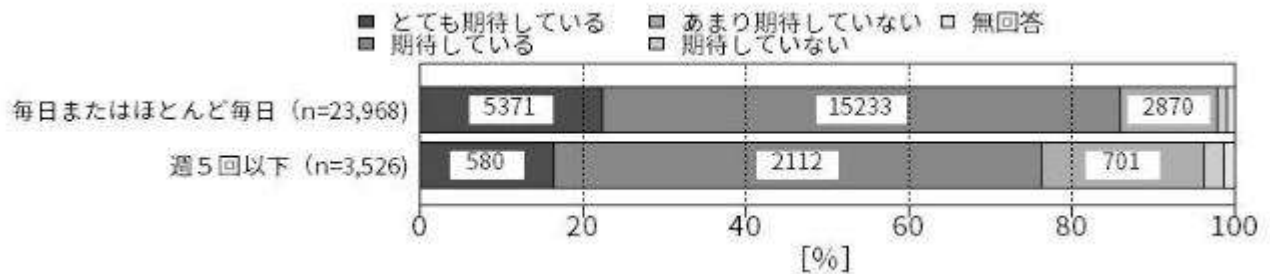
図 185. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり  
 （子どもと一緒にいる時間（休日））

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））を見ると、大きな差は見られなかったが、無回答の割合が共に大きかった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）

（子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(4)）

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

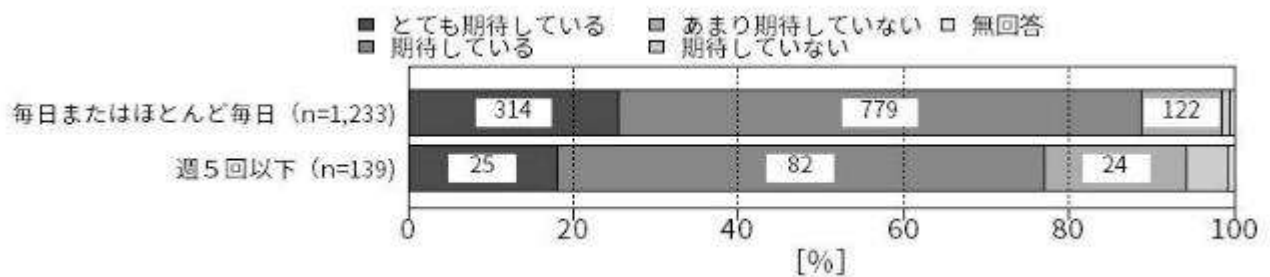


図 186. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）

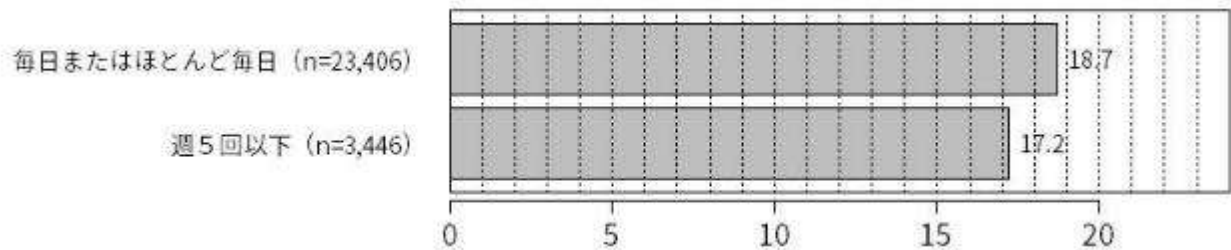
朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人では、「とても期待している」「期待している」をあわせて、88.7%であったのに対して、「週5回以下」の人では、「とても期待している」「期待している」と回答した人をあわせて77%であった。

### 朝食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

(子ども票 問 5(1) × 子ども票 問 26(1)～(6))

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 148 上の説明参照。

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

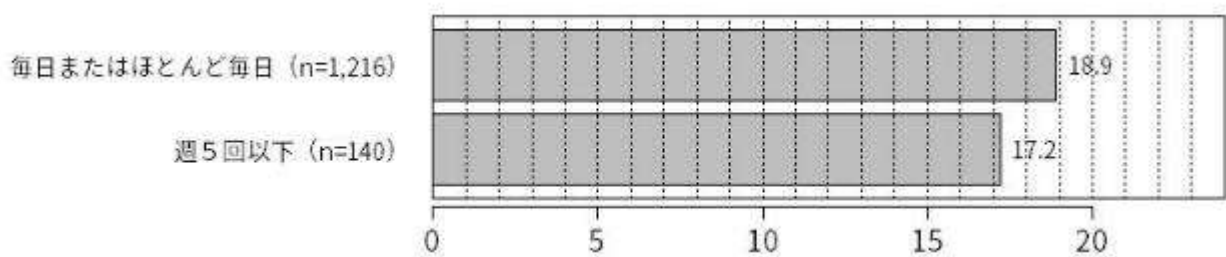
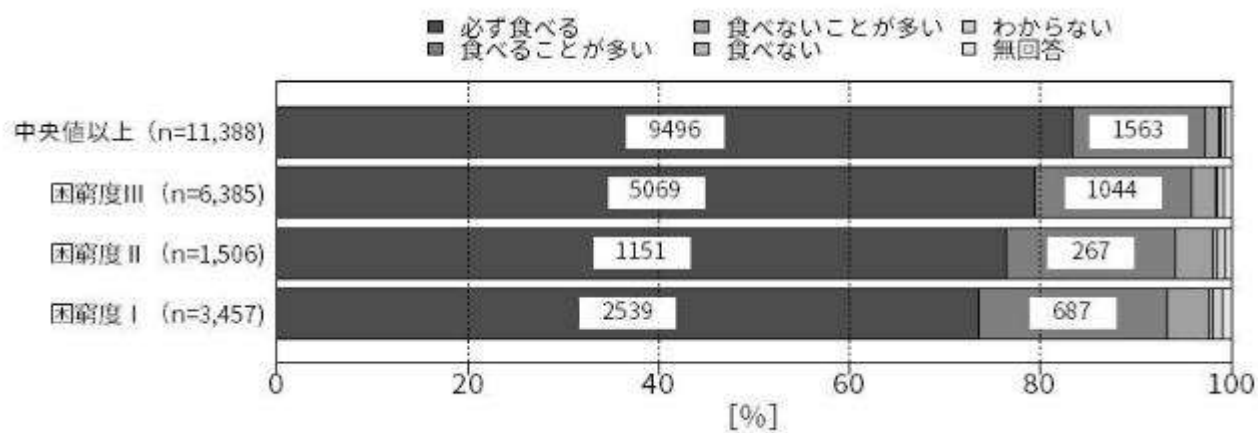


図 187. 朝食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

朝食の頻度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、18.9 点であったのに対して、「週 5 回以下」では、17.2 点であった。

困窮度別に見た、昼食の頻度（子ども票 問 7）

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

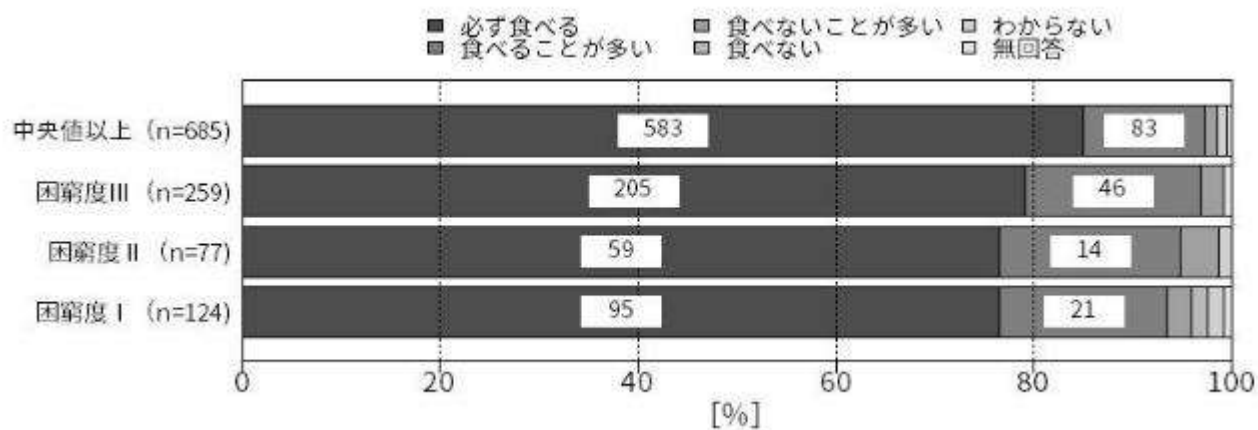
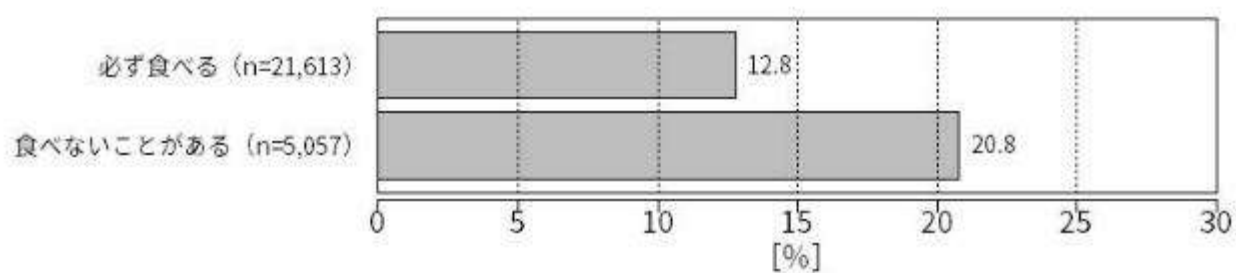


図 188. 困窮度別に見た、昼食の頻度

中央値以上群では、昼食を「必ず食べる」が 85.1%であったのに対し、困窮度Ⅱ群では 76.6%、困窮度Ⅰ群では 76.6%であった。

<大阪市24区>



<大阪市阿倍野区>

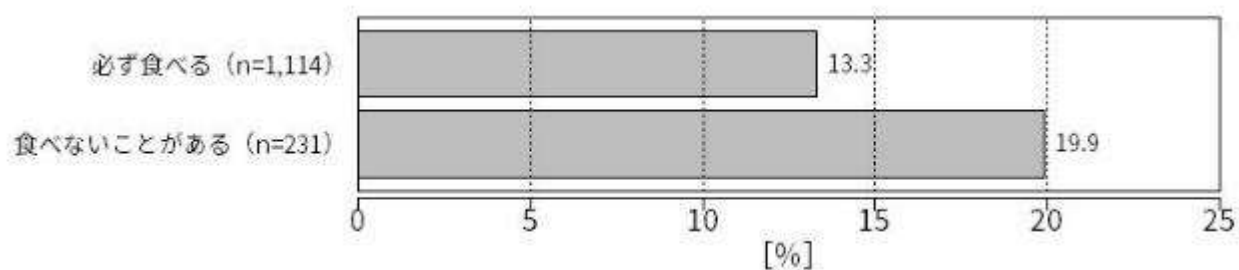


図 189. 昼食の頻度別に見た、相談相手のいない割合

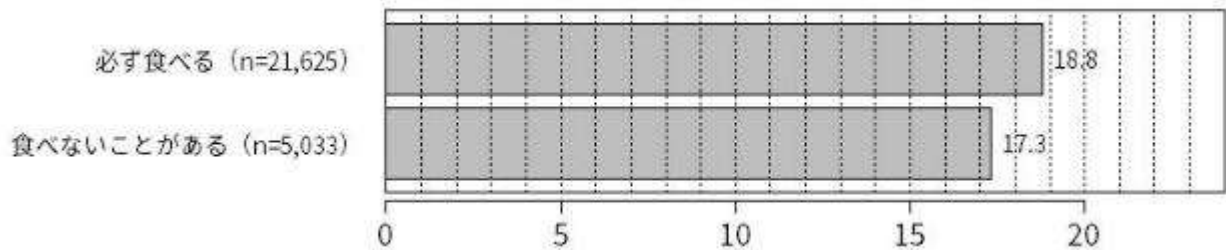
昼食を食べない群では、「相談しない」と答えた割合が 19.9%であった。

昼食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

(子ども票 問7 × 子ども票 問26(1)～(6))

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図148上の説明参照。

<大阪市24区>



<大阪市阿倍野区>

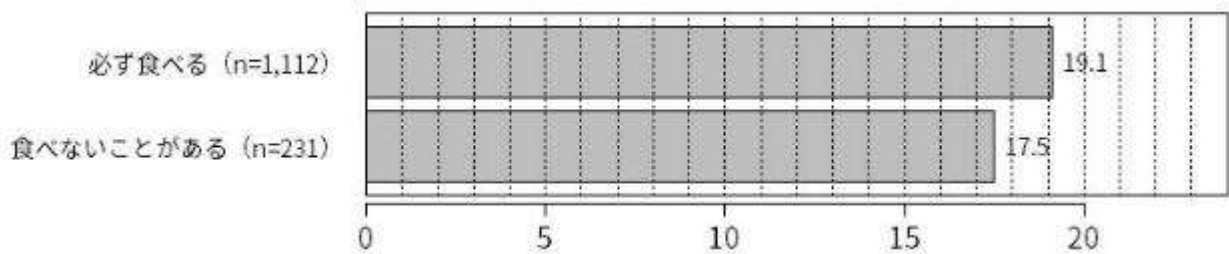
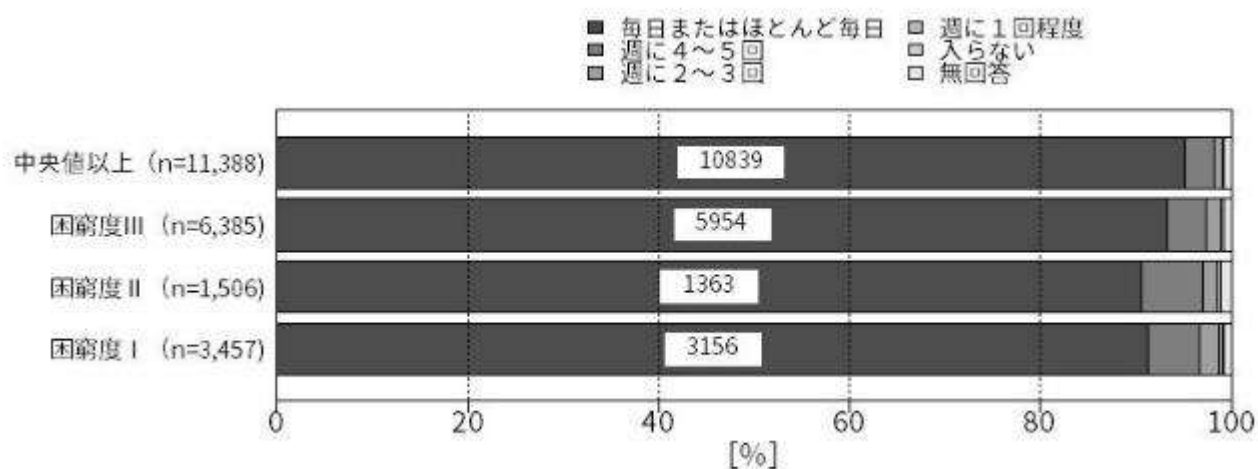


図190. 昼食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

休日の昼食の頻度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「必ず食べる」と回答した人の得点が19.1点であったのに対して、「食べないことがある」と回答した人は17.5点であった。

困窮度別に見た、入浴頻度（子ども票 問 8）

<大阪市 24 区>



<大阪市阿倍野区>

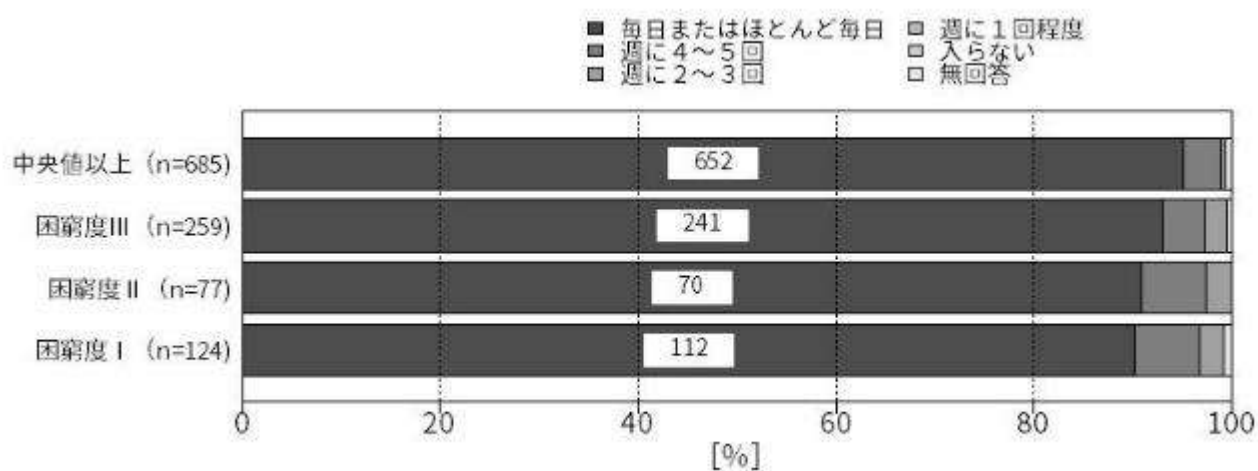
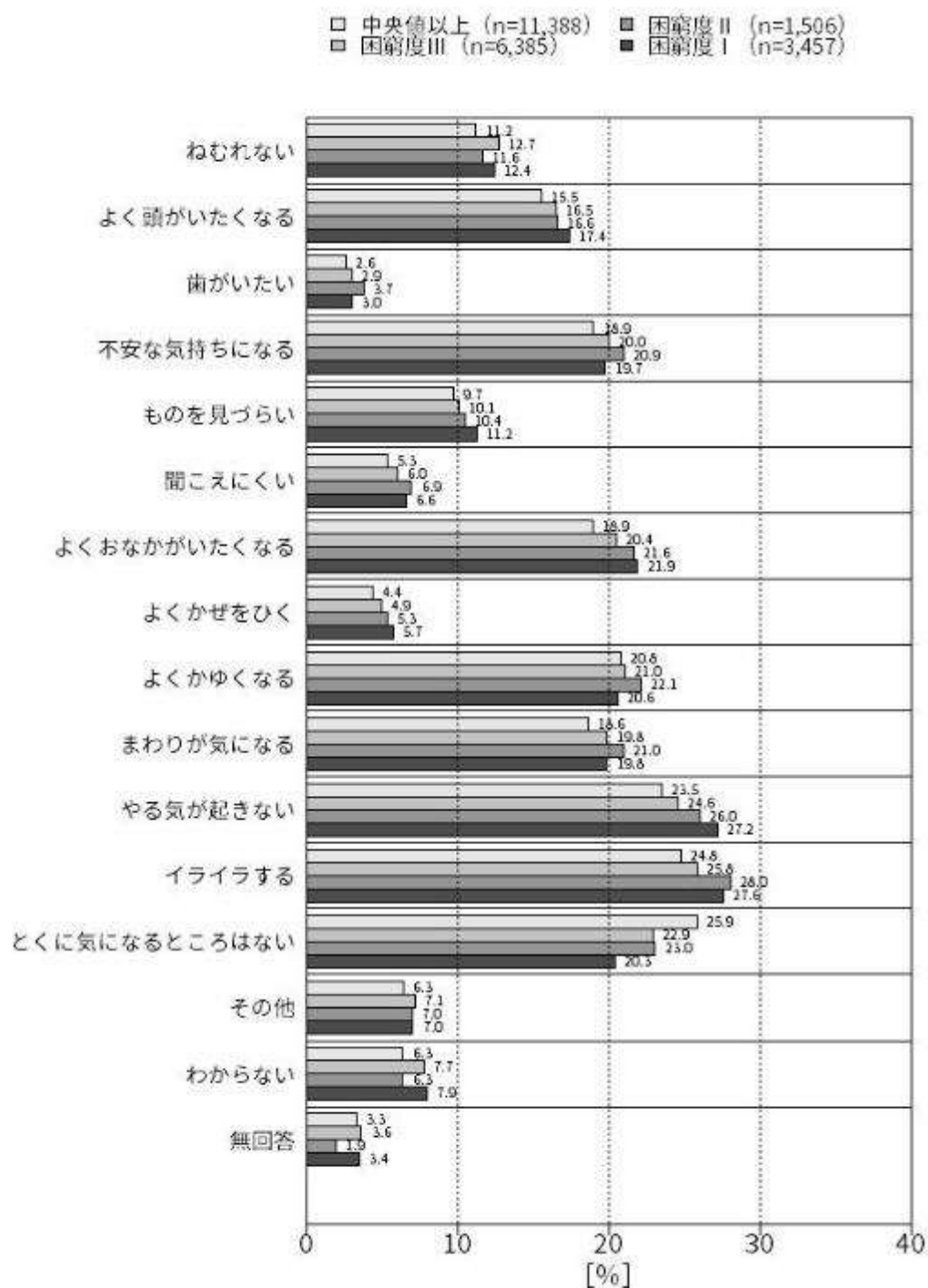


図 191. 困窮度別に見た、入浴頻度

困窮度別に入浴頻度を見ると、「毎日またはほとんど毎日」と回答する割合は中央値以上群では95.2%、困窮度Ⅰ群では90.3%であった。

困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること（子ども票 問 24）

<大阪市 24 区>





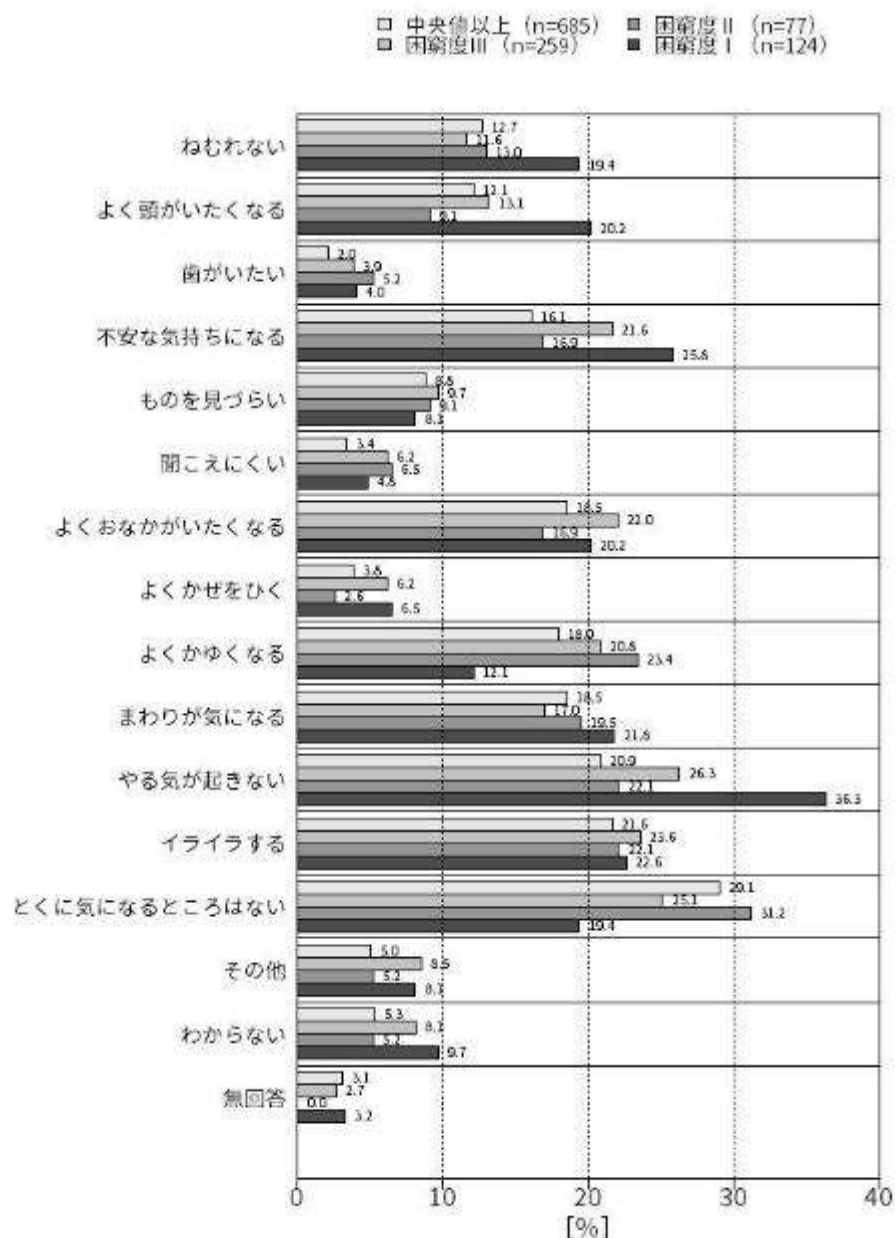


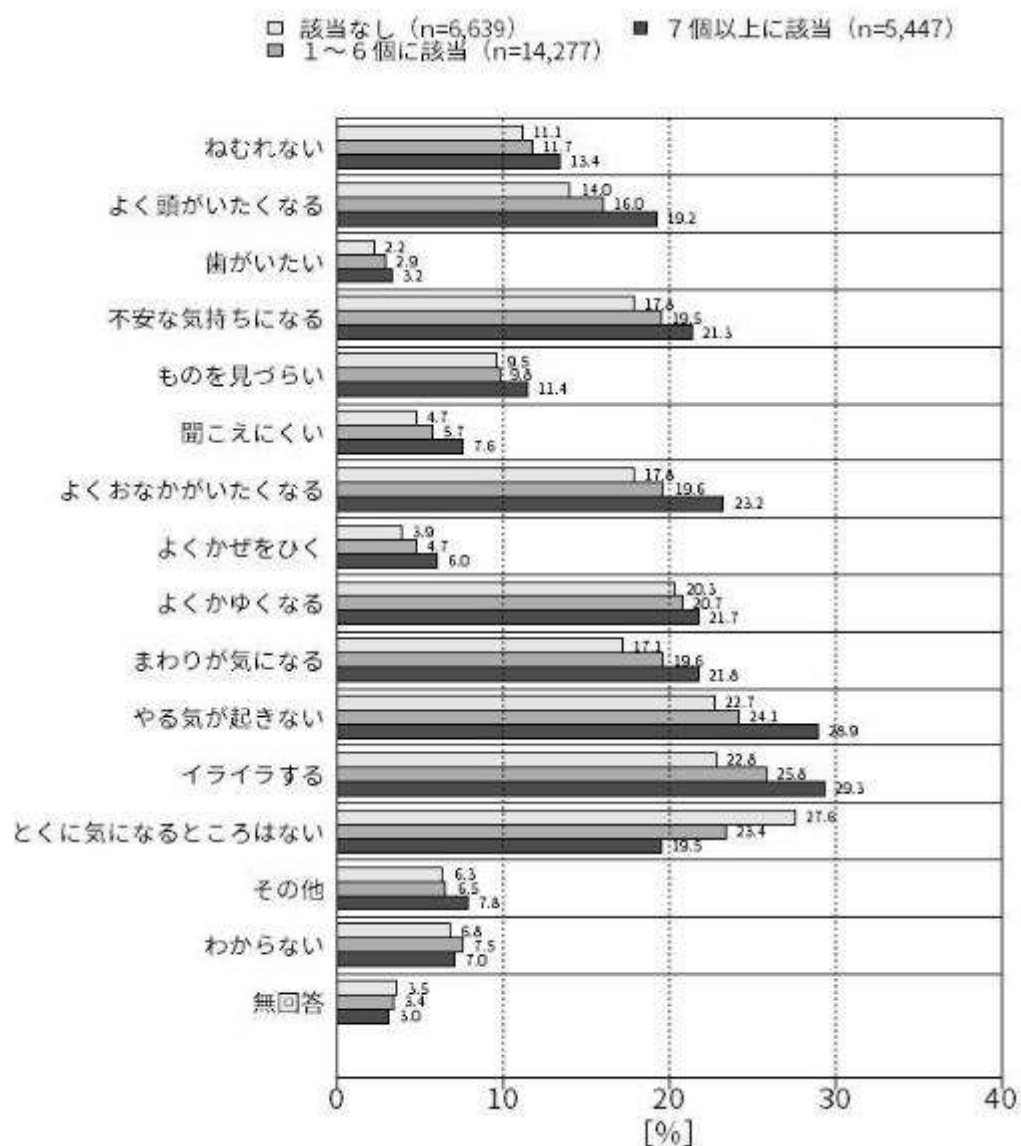
図 192. 困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること

困窮度別に自分の体や気持ちで気になることを見ると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「歯がいたい」4%（中央値以上群に対して、2倍、「やる気が起きない」36.3%（1.7倍）、「よくかぜをひく」4%（2倍）となり、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数みられた。さらに、中央値以上群と上記の項目ほどの差はないものの、困窮度Ⅰ群では、「やる気が起きない」36.3%（1.7倍）、「イライラする」22.6%（1.6倍）など、心理的・精神的症状を示す項目での割合の高さも無視できない。

経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること

(保護者票 問7 × 子ども票 問24)

<大阪市24区>



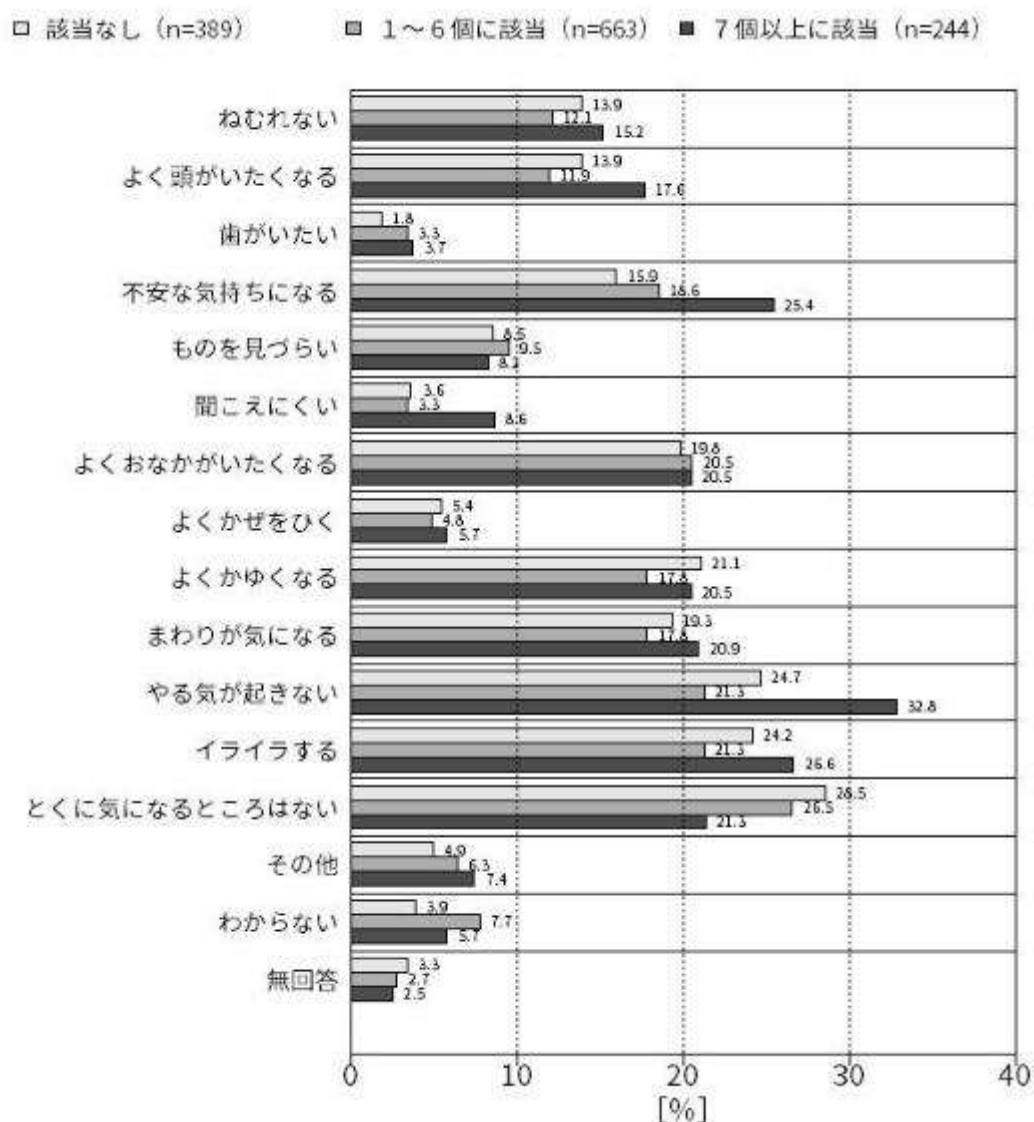


図 193. 経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること

経済的な理由による経験の該当数別に自分の体や気持ちで気になることを見ると、「該当なし」と「7個以上に該当」と回答した人との差が大きい項目に着目しながら、「7個以上該当」群の数値を挙げると、「聞こえにくい」8.6%（「該当なし」に対し2.4倍）、「歯がいたい」3.7%（2.1倍）、「不安な気持ちになる」25.4%（1.6倍）となっている。さらに、「該当なし」と上記の項目ほどの差はないものの、「7個以上に該当」と回答した人では、「やる気が起きない」32.8%（1.3倍）、「よく頭がいたくなる」17.6%（1.3倍）、など、ここでも心理的・精神的状況を示す項目での割合の高さが示された。